Z32-B88

大正九年七月一日發行
大正九年六月七日印刷納本

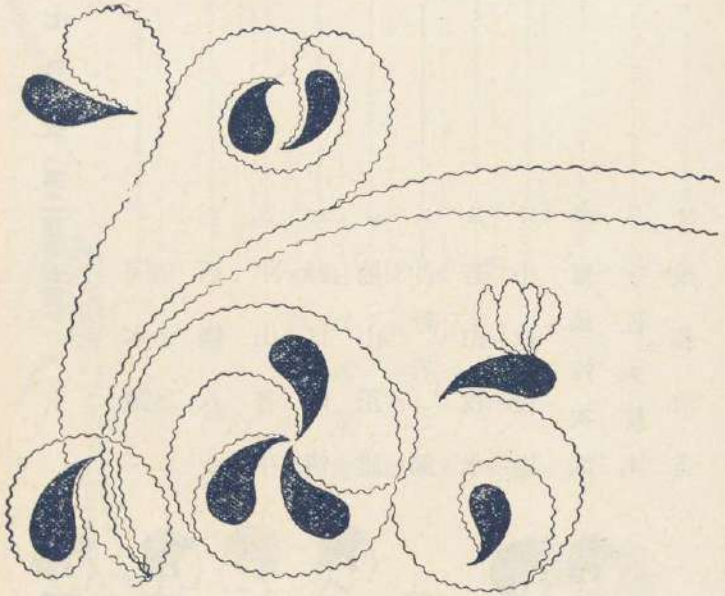
修監　馬生島友　村藤崎島

金の船

七月号

国立国会
8. 3. 26
図書館

第弐巻　第七号



「金の船」七月號（第二卷第七號）

小犬（表紙、石版刷）……岡本歸一
ボート（口繪、三色版）
寢臺の舟（童謠）……西條八十
お山の鳥（曲譜）……中山晋平
お山の鳥（童謠）……野口雨情
惡い仲間（童話）……楠山正雄
山六爺さん（長篇童話）……沖野岩三郎
夏のけしき（童謠）……若山牧水
今はの一ふし（童話）……小林愛雄
牛千匹（童話）……齋藤佐次郎
烏のお灸（童謠）……宇佐美柳雨
花火（童話）……後藤末雄
鷄盜坊（童話）……
一ノ谷合戰（歷史童話）……窪田空穗
白犬（推奬）……大西淳
蠅一疋（繪話）……
十六角豆（童謠）……野口雨情
琴の太郎（長篇童話）……小山內薰
蟻のお國（長篇童話）……長田秀雄
小春（童謠）……野口雨情選
海（幼年詩）……若山牧水選
妙な題（綴方）……
私の學校（自由畫）……山本鼎選
挿繪……岡本歸一

寢臺の舟（スティーヴンソン）

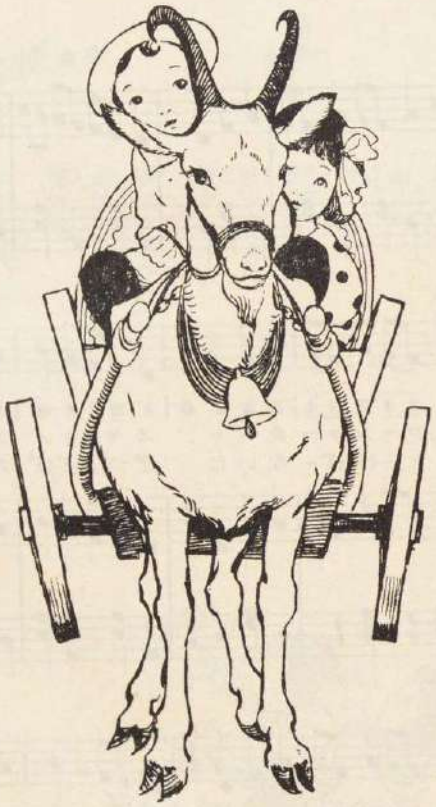
西條八十

僕の寢臺は小ちやなボート、
乳母が抱いて乘込ませ
水夫の服を着せてから
眞暗がりへ押し流す。

岸に並んだ人たちに
僕は舟から暇乞ひ
チツと眼を閉ぢ、走り出しや
なにも聞えずまた見えず。

水夫する身の拔目なく
寢臺に持込む品々は
お祝菓子の一片か
時にや玩具が二つ三つ。

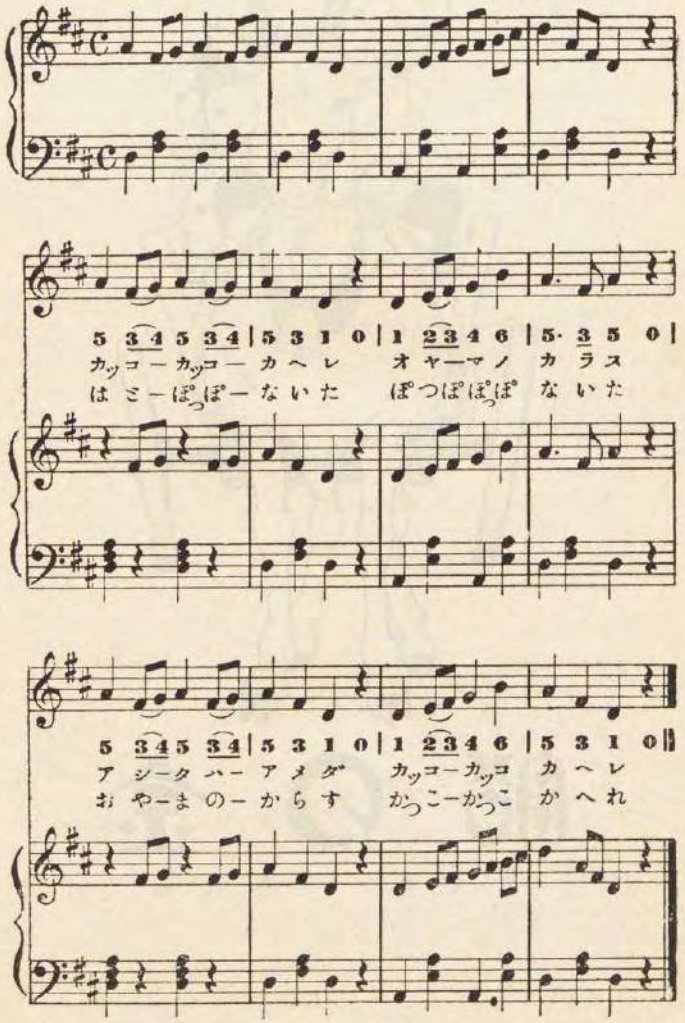
終夜暗を漕ぎゆけど
さて白々と夜が明けりや
僕のお舟は室の中
埠頭の岸にもと通り。



金の船

第廿三巻　第七号

作曲　中山晋平



お山の烏

野口雨情

カツコ〳〵歸れ
お山の
烏

明日は雨だ
カツコ〳〵
歸れ

鳩ポツポ啼いた
ポツポ〳〵
啼いた

お山の烏
カツコ〳〵
歸れ

惡い仲間

楠山正雄

一

世の中がよくなつて、この頃は惡い人間も爲事がありません。扶持にはなれた盜坊が、凹んだ目ばかりきよろ〳〵光らして、ぼんやり川の岸に立つて水をながめてゐました。するとそこにもう一人、前から來てゐる男があつて、これもぼんやり川の水をながめてゐました。傍に寄つてもその男は知らん顏をして、外方を向いたまゝ水をながめてゐました。盜坊はすこし癪にさはつて、こちらもやはり知らん顏で外方を向いたまゝ

『お前さんなんかは、石の泳ぐところを見たことはないだらうな。』といひました。

かうひとり言のやうにいふと、その男はやはり外方を向いたまゝ、

『あゝ見たとも。それどころかおれは、石が水の中からとび上つて、天上するところを見たよ。』

と、これも獨りごとのやうにいひました。

『ふん、お前さんなか〳〵話せるなあ。一番二人で組になつて、お金儲けをすることにしよう。なんでも一しよに連れ立つて、近所の國の王さまの御殿を探しに出かけるのだ。おれが先きに一人で行つて、王さまに口から出まかせな法螺話をするから、お前さんはあとからのこ〳〵ついて行つて、おれの法螺話の證人になるのだ。』

盜坊がかう言つて相談をかけると、その男は、

『うん、よし〳〵。』といつて、この時はじめてこつちを向きました。むつちりと下ぶくれな顏をして、小さな目が奥でにや〳〵笑つてゐるやうな男でした。

盜坊と嘘つきは、そこで組になつて、旅に出かけることになりました。

二

五六日歩いて行くと、ある町へ出ました。

二人はこゝでわかれて、盜坊だけ一人王さまの御殿へ出かけて行つて、王さまのお目通りに出て、いろ〳〵と旅のめづらしい話をした後で、

『陛下、喉がかわきましたから、葡萄酒を一杯頂かせて下さいまし。』といひました。

その時王さまは頭をかいて、

『折角だがそれは困るよ。今年は葡萄がまるでとれない。』といひました。

すると盜坊はいきなり腹をかゝへて、げら〳〵笑ひ出しました。

『何がをかしい。』と王さまはぷり〳〵しますと、盜坊はなほも笑つて、

『でもわたくしがつい昨日通つて來た國では、一

本の葡萄の枝から葡萄酒が十二樽搾れたといつて大さわぎをしてゐましたよ。』といひました。

『馬鹿な。今年はどこも葡萄は不作だ。それは嘘だぞ、三百圓の賭をしよう。』と王さまは、いよいよ赤くなりました。

『いゝや、ほんたうです、三百圓の賭をしませう。』と盜坊も負けずにいひました。

そこで王さまと盜坊は、三百圓のお金を賭けることになり、王さまの家來が一人、實否を見とどけに行くことになりました。

家來は早速馬に乘つて出かけて行きましたが、町を出はつれると、往來の角に一人肥つた顏をし

て目の奧でいつもにや〳〵笑つてゐるやうな男が立つてゐました。

『もし〳〵あなた、馬に乘つて、大そう急いでどこへお出でなさる。』とその男は聲をかけました。

家來が行先を話しますと、その男はおなかのはち切れるほど笑つて、何だ、それなら自分の今までゐた國だといふのです。

さう聞くと家來は何だか遠方わざ〳〵出かけて行くのが、馬鹿々々しくなりました。

『どうだね、お前さんの國では、今年は葡萄がたくさんとれて、一本の枝から十二樽搾れたといふが、ほんとうかい。』とたづねました。

『さあ、それは知りませんねえ。』とその男はいひました。『たゞわたくしが通つて來たところでは、一本の葡萄の枝を三人がゝりで、三日かゝつて伐つてゐましたよ。』

家來はそこでこの男に十圓やつて、一しよに馬にのせて、王さまの御殿へ歸つて行きました。

王さまは待ちかねたといふ風で、

『どうだね、行つて行たか。葡萄の話は嘘だらう。』といひました。

すると家來はぬからぬ顏をして、

『はい、行つてまゐりました。どうして嘘ではございません。しかしわたくしの申すことだけではどうかと思ひまして、證人をつれてまゐりました。』

から言つて、一しよに連れて來た嘘つき男を、王さまの御前に出しました。

そこで賭は王さまの負になつて、盜坊は三百圓お金儲けをして、ほく〳〵しながら、嘘つき男と一しよになつて、また旅に出て行きました。

『どうだね、また外の王さまの御殿へ出かけて行

つて、お金儲けをしようね。』と盗坊は嘘つき男にいひました。

三

お隣の國へ行くと、盗坊は一人でまた王さまの御殿へ出かけて行きました。王さまに會つて、いろ〳〵と旅の話をしました末に、

『陛下おなかが空きましたから、キャベツのお粥を頂かせて下さいまし。』といひました。

王さまは首をふつて、

『おや〳〵それはだめだよ。今年は畑に蟲がついて、キャベツはのこらずやられてしまつたよ。』といひました。

その時盗坊は、ふんと鼻で笑つて、

『それはお氣の毒さまですね。わたくしが今までゐた國では、一株のキャベツが手桶に十二杯ありましたよ。』といひました。

『でたらめをいふな。』と王さまはぷん〳〵おこつてしまひました。

『それが嘘なら六百圓賭けませう。』と盗坊はいひました。

『それがほんたうなら六百圓賭けよう。』と王さまも負けずにいひました。

こん度も、家來が馬にのつて、お隣の國へ見に行きました。するとこん度も、往來の角に男が立つてゐて、お隣の國から來たといひました。

『どうだね、お前さんの國では、今年はキャベツがたくさんとれて、一株のキャベツが手桶に十二杯あつたといふが、ほんたうかい。』

かう言つて、家來が聞きますと、

『さあ、それは聞きませんでしたよ。』と男はいひました。『たゞ十二頭の馬に十二臺の荷車を引かせて、一株のキャベツを市場へ運んで行くところを見ましたよ。』

こん度も家來は十圓その男にやつて、一しよに王さまの御殿へ連れて歸りました。それでこん度

も盗坊と嘘つきはうま〳〵六百圓お金儲をして、ほく〳〵しながら出て行きました。

四

惡い仲間は、これで都合九百圓のお金をせしめて、またそのお隣の王さまの國に出かけて行きました。こん度も盗坊は王さまに會ふと、いきなり、

『陛下、おもしろいお話があるのを御承知でいらつしやいますか。お隣の國の或町で、お寺の塔の天邊に鳥が一羽とまりました。その鳥の嘴は、それは長くつて、空にとゞくものですから、たうとう星を二つ三つ、つゝき落してしまつ

たのです。』

『貴さまは、氣がちがつてゐるな。』と、王さまは頭から噛みつくやうに叱りました。

『どういたしまして、正氣です。これが嘘なら千二百圓賭けませう。』と盜坊はいひました。

『何の、それがほんたうならおれは千二百圓賭けるぞ。』と王さまは猛つていひました。

こん度も家來が馬にのつてわざ〳〵お隣の國へ見に行きました。こん度もやはり往來の角に男が立つてゐて、お隣の國から來たといひました。そこで家來はその男に、長い嘴の鳥の話はほんたうかといつて聞きました。

『そんな話は、知りませんが。』と、男はいひました。『たゞ十二人の男が、一本々々箒を以つて、化物のやうな大きな玉子を穴倉に押し込むのだといつて、うん〳〵いつてゐましたよ。』

『それはすてきだなあ。』と家來はうれしさうに叫びご名を立てました。さうして十圓その男にやりながら、

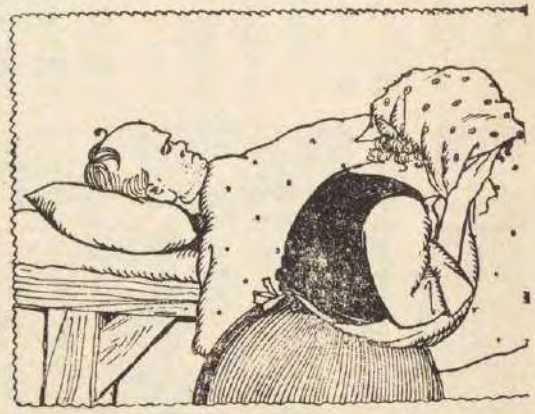
『おい、おれと一しよに王さまの御殿へ行つて、その通り王さまに申上げてくれ。さうするとおれも馬鹿々々しい長い旅を爲ずにすむのだ。』

そこで嘘つき男が王さまの御殿へ行つて、その話をしますと王さまも、爲方なしに、千二百圓拂つてやりました。

五

さて二人の惡い仲間は方々の王さまを欺してとつた二千百圓のお金を山分けにしましたが、何分盜坊のくせで、いつの間にかその中三圓だけ、餘分を自分の方にくすねて置きました。さうとは知らない嘘つき男の方では、家へ歸つてもう一度勘定し直して見ますと、どうしても三圓足りません。そこで盜坊の家へ出かけて行つて、責めますと、盜坊は平氣の平左で、

『はあさうだつたかい。生憎細かい金がないからこん度の土曜日にまたお出で。上げるから。』といひました。



かうは言つたもの、もと〳〵お金を返す氣なんぞはないのですから、約束の土曜日が來ると盜坊は床の上に仰むけに突つ張り返つて、死んだまねをしてゐました。さうしてお上さんは、愁で度々目をこすつてぼろ〳〵涙をこぼしながら、嘘つき男が來ると、御亭主は死んでしまつたから、三圓のお金も拂へないといひました。

けれどもどうせ惡い仲間同志のことですから、蛇の道はへび、こんな手ではなか〳〵欺されません。おや〳〵三圓拂はずに死んでは、お前さんの御亭主も浮ばれまい。一つお互ひに氣のすむやう

に、この鞭で三つ死人を引つぱたいて、それで帳消しにしてやらう。』

かういふ聲が耳に入ると、床の上に寝てゐた盗坊はびつくりして死んだことは忘れてとび出して來ました。そうしてこん度の土曜日こそは、間ちがひなく拂ふからといつて、嘘つき男をなだめて歸しました。

その次の土曜日の朝になると、盗坊は、こん度は秣小屋の秣の下にもぐり込んで息をころしてゐました。

約束どほり嘘つき男がやつてくると、盗坊のお上さんはまた兩方の目に一ぱい涙をためて、こん度も御亭主が死んでしまつたといひました。

『死んでどこへ埋めたね。』と嘘つき男は

聞きました。

『秣小屋の中に埋めました。』とお上さんはいひました。

『ぢやあ三圓の代りに、秣を三車もらつて行くよ。』

と嘘つき男はいひました。さうして長い熊手をかついで來て、遠慮會釋もなく秣の中をがり〳〵掻きまはしはじめましたから、中に隠れてゐた盗坊は命から〳〵べそをかいて、這ひ出しました。

そこでまた、盗坊と嘘つきは仲直りをしてこの次の土曜日を約束して別れました。

六

さていよ〳〵約束の日になりますと、夜の明けない中から、盗坊は起き出して、近所のお寺の穴倉にそつと忍び込みました。そこは一周忌の間かりに死人の棺を收めて置くところで、そこらにいくらも古い石の棺のあるのを幸ひ盗坊は、その中の死人と入れかはつてこん度もせい〳〵突つぱりかへつて死人のまねをしてゐました。

ところが嘘つき男も、智慧では負けない男ですから、てつきりこゝと目星をつけて、お寺の穴倉

にそつと忍び込みました。やがて、しばらくは何が何やら見當がつかないでゐますと、つひそこへ窓の外で大勢ひそ〳〵話をしてゐるのです。嘘つき男は思はず耳を立てますと、それは山賊の仲間で、とつて來た金銀や寶をこの穴倉の中に隱してまたどこかへ爲事に出かけて行く相談をしてゐるのでした。さういふ中も、山賊の仲間は窓の格子を外して、どや〳〵中へ入つて來ました。さうして今にもそこに立つてゐる嘘つき男のすがたを見つけさうにしたので、こちらはあはてゝ、黒いマントを頭からすつぽりかぶつて、壁の隅に突つぱり返つて立ちました。それは薄くらがりで見ると、古ぼけた石像のやうでした。

さて十二人の山賊共は、薄くらい穴倉の中で車座に坐つて寶の分配をはじめましたが、中でお頭

と叫び立てました。

この聲の止むか止まないに、いきなり石の棺の蓋があいて、盜坊はびよこんと中からとび上がりました。壁の隅からは、石像がのこ〳〵動き出しました。

山賊共はワッといつたなり、金銀も寶も何もかもはうり出したまゝ、這ふ〳〵の態で逃げ出しました。やつと外へ出ると、はあ〳〵息をはづませながら、てん〴〵にもう二度とあんな所へ近よるものではないといつてゐました。

そこで惡い仲間は、こん度は仲よく寶を分けて家へ持つて歸りました。

それから後はどうしましたか、本には書いてありません。（をはり）

山六爺さん（長篇童話）

沖野岩三郎

五

ごうん、ごうん！　とお寺の鐘が鳴るたんびに、山六爺さんは鹿へ乗つて駈け出しました。婆アさんは紙の旗を押立てながら、黒はワン〳〵と吠えながら、狼はウーウー唸りながら其後へついて走りました。そして、いつでも黒と狼とは泥棒を小高い山の上の、大きな樹の上に追ひ上げました。すると山六爺さんは、夜明方になると其所へ行つて、

『降りて來い、もう赦してやるから。』と笑ひ乍ら申しました。斯うして、此村へ入つて來た泥棒が皆な山六爺さんの家來になつて、爺さんを、『お殿樣、お殿樣、』と尊びました。

或日山六爺さんは、婆アさんに對つて、

『おい、婆アさん、家の家來は何人あるんだい、一寸數へて呉れないか。』と言ひました。『はい〳〵、宜しうございます。』と婆アさんは言つて緣側の所から、『おうい、家來共、みんな此所へ集れ！』と申しました。すると畑に働いて居た者も田圃に居たものも、山に居たものも、皆な庭へ集つて來て、ずらりと並びました。そこで婆アさんは右の端から左の端まで勘定してみますと、皆なで總計四十七人ありました。で、婆アさんは爺さんの處へ行つて、

『殿樣！　爺さまの殿樣。家來は皆なで、四十七人あります。』と申上げました。

「よろしい、俺が今出て行つて、言ひ渡す事がある。」と爺さんは横柄に言つて、殿様のやうな歩きつぷりをしながら縁側へ出て行きました。そして、爺さんは何を言ふかと思ふと、

「皆さん、誠に済みませんが、今日中に裏の山へ行つて、牝鹿を一疋追出して來て下さいませんか。」と申しました。

「宜しうございます。しかし夫れは、どうなさるのでございますか。」と一人の家來が申しました。

「其の牝鹿は、婆アさんの馬にするのです。」と爺さんが云ひますと家來達は皆な手を拍つて笑ひました。

「さうですか、夫れでは直ぐ捕へて來ませう。」と云つて四十七人は皆な山の中へ入つて行きました。

四十七人は山の中へ入つて行つて、ワアー、ワアーと叫び乍ら尋ねて居るうちに、一疋の大きな牝鹿が、笹の中から駈け出しました。

「鹿が居たぞー　角の無い牝鹿が居たぞー」と一人が叫んだので、皆なは、山の上の方から、ワア、ワアと一生懸命に喚めきました。

すると鹿は吃驚して前の川の中へ飛び込んで、下へ〳〵と泳いで

行きました。

「鹿が居たぞー」といふ聲を聞付けたので、爺さんは、黒と狼とを家の中へ繋いで置いて、早速前の田圃の畦へ行つて、山の方を見ますと、四十七人の家來達は、峯の方からどん〳〵と下の方へ走つてゐました。

「おうい、鹿は何所に居る？」と爺さんが叫びますと、

「鹿は川を泳いで居るー」と山の上から答へました。

「婆アさん〳〵、鹿が川を泳いで來るさうだ、川上を見て居なさい。」

爺さんは、さう云ひ乍ら急いで川原へ降りて行きました。

「爺さん、爺さん、鹿が來たー　角の無い牝鹿が來た、夫れ〳〵其の上の方から泳いで來る……」

婆アさんは歯の抜けた口を、ありつたけ開けて叫びました。

爺さんは川端の岩の上に立つて眺めてゐますと、大きな〳〵鹿が水面に首だけ出して川上から静かに泳いで來ました。

爺さんの立つてゐる下は深い〳〵淵でしたから、鹿は其の淵まで泳いで來た時、一寸爺さんの方を眺めましたが、又た静かに下の方

へ泳いで行きました。

『爺さん〳〵、早く〳〵、あの牝鹿を捕へて下さいー』

婆アさんは大きな聲で叫びました。夫れを聞いた爺さんは、思はず、高い岩の上から、着物を着たまゝどぶんー と川の中へ跳び込みました。そして間もなく鹿の側まで泳ぎつきました。

『脊に乘りなさいー 其の鹿の脊に乘りなさいー』と婆アさんは岸から言ひました。

『あつと、よし。』と言つて、爺さんは鹿の脊に乘りました。すると鹿は首だけ水の上に出して、爺さんを脊に乘せたまゝ矢張り靜かに泳いでゐました。

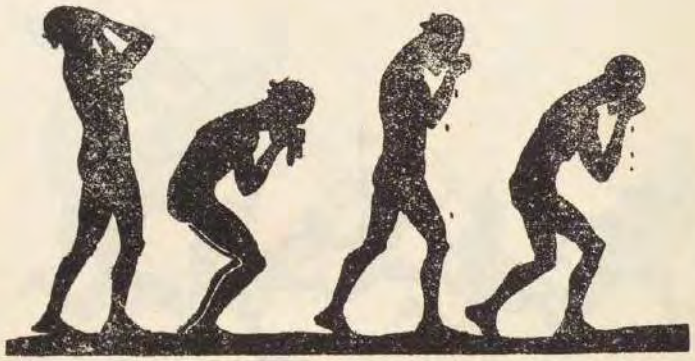
『爺さん、早く〳〵其の帶を解いて、鹿の首を縛りなさいー』

婆アさんが、さう言つたので、爺さんは大急ぎで自分の帶を解いて、夫れで鹿の首を、しかと縛りました。そして夫れを手綱にして、

『はい〳〵、はい〳〵、』と云つて、面白さうに泳いでゐました。

彼これするうちに、四十七人の家來達は、皆な川端に駈けつけて、

『彼れ見よ、殿樣は、鹿に乘つて水を泳いでゐる、あれ〳〵。』と叫



びました。

爺さんは苦も無く鹿を捕へたもんだから、自慢らしく大きな聲で、

『ハイ〳〵、ハイ〳〵、』と言つて手綱を引しめ乍ら泳いでゐましたが、鹿は一町ばかりの淵を泳ぎ越して、淺瀨の所まで來た時、すつくと立上つて、ぶる〳〵と身體を搖ぶつたと思ふと、今まで得意さうに『ハイハイ』と言つて脊に乘つてゐた山六爺さんは、ぼちやーん！ と水の中へ眞逆樣に振落されてしまひました。

『大變だ、大變だ！』と家來達は皆な着物を着たまゝで、ざんぶ、ざんぶと川の中へ跳り込みました。

『早く助けて上げて下さい、爺さんは、あすこを流れてゐる……』

婆アさんは聲を嗄らして叫びました。四十七人の家來達は、皆な川下を流れてゐる爺さん目がけて泳いで行きました。

一人の男が第一番に泳ぎついて、『殿樣ー』と言ひ乍ら、摑んで見ますと、これは又た、どうした事です。爺さんだと思つたのは、夫れは山六爺さんの着物だけでした。

二番目に泳ぎついた男は、おい〳〵泣き乍ら、

『お婆アさん、殿様は死んで了ひました。もう此通りに着物だけになつて了ひました。』

と云つて泣きました。四十七人は皆な川原に這上つて、爺さんの着物を石の上に擲げて、ワン〳〵と泣いてゐました。

婆アさんは岸の上から、

『お爺さーん、山六爺さーん、殿様の爺さーん……』と言つて泣いてゐますと、

『おうーい、』と遥か向の山の中から、爺さんらしい聲が聞えました。

『お爺さーん、山六爺さーん……』

『おうーい、誰か來てくれー』

夫れは確かに爺さんの聲でした。

『何所だらう？　何所だらう？』と皆なは不思議に思つて山の方を見てゐますと、右手の高い〳〵樫の木の下の所へ、山六爺さんは、丸裸のまま大きな牝鹿に乘つて駈け出して來ました、鹿はピョコン〳〵と跳ね廻つて、爺さんは背から振落されさうでした。

『そうれ、爺さんを助けてあげろ。』と皆なは走つて行つて、其の鹿

をぐるりと取卷いて、やつとの事で牝鹿を取押へました。けれども牝鹿は人間が恐ろしくつて、ピンコ、シャンコ飛び搬ねるので、爺さんは、

『其の着物を持つて來い。』と言ひました。そして爺さんは自分の着物をすつぽり鹿の頭に被せて、うちへ伴れて歸りました。そして五月六月飼つてゐるうちに、とう〳〵其の牝鹿もすつかり馴れて了つたので或日爺さんは、

『おい、婆アさん、今日は皆なつれ立つて、行列をして見ようぢやないか』といひました。

『ねえ、私も一緒に行きませう。』と云つて婆アさんは、牝鹿に乘りました。

黒が一番前に、其の次に婆アさん、第三番目に二疋の狽、其次に爺さん、第五番目に旗持といふ順序で、殘りの四十六人は皆な竹の筒を喇叭のやうに、ブウ〳〵と吹き乍ら村の方へ練つて行きました。

夫れを見た村の子供達は、

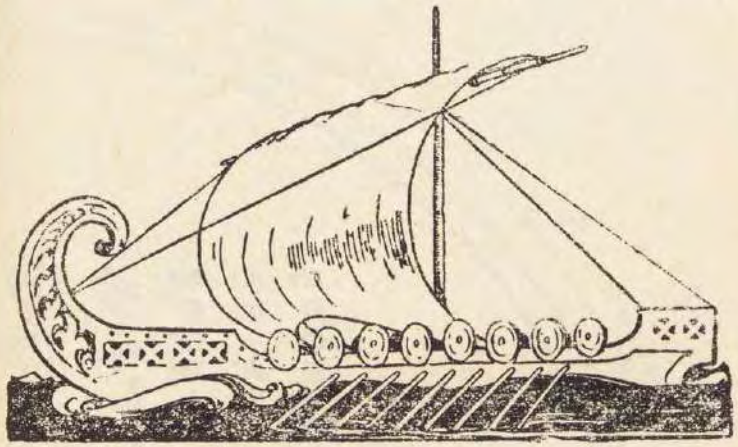
『大名行列、大名行列』と云つて、ワア〳〵騒ぎました。（つゞく）

夏のけしき

若山牧水

槍持　旗持
眞白　小白
雨の行列

川の向うを急いで過る
雷は峠を越えて
雨の行列も行き過ぎ
山から山に
虹の橋が懸つた



今はの一ふし

小林愛雄

一

昔のこと、ギリシヤの國にアライオンといふ偉い歌ひ手がをりました。この人が歌をうたへば、鳥も獸つてしたひ、犬も吠えなくなつたといふことです。

ですから、コリンスの都へ來る人は、王樣の御殿の一室で、不思議な美しい聲を出すアライオンの歌を、どうかして一生に一度でいいから聽きたいと思ひました。

その頃、遠いシシリーといふ島に、唱歌の競爭會があります。其處には、國々の有名い歌ひ手が集まつて、唱歌の腕くらべをします。それで一番上手に歌つた人は、大變立派な褒美をもらふのでした。

アライオンは、此の會のことを聽いて、どうしても行つてみようと思ひました。けれども遠い島へ行くのですから、友達はみんな留めましたが、アライオンは、

『なあに、大丈夫だ、きつと僕が褒美をもらつて來る』

と云つて、その島をさして行く船に乘りました。

二

島には大勢の歌ひ手が集まりました。歌ひ手は一人一人、晴れた日の丘の上に起つて美しい聲で歌をうたひました。けれど、どの歌ひ手も、一番仕舞ひに歌つたアライオンにかなふものはありませんでした。

アライオンはとう〳〵黃金の褒美をもらひました。そこで、この歌ひ手は黃金を船に積んで、國へ歸ることになりました。

斯うして船はまた島を離れました。空が透き通るやうな日で、海は鏡のやうに靜かでした。歌ひ手は船の中で、遠の友達に逢へる日の近寄つたことを、樂しんでゐました。

けれどその船に乘つてゐた大勢の水夫は、恐い眼付きをして、アライオンを見てゐました。惡い水夫達は、歌ひ手の褒美の黃金を取つて仕舞はうと計つたのでした。

三

水夫達は手に〳〵洋刀を持つて、アライオンのまはりに推し寄せて來て、

『さあ、お前を生かしては置けないぞ。お前が土に埋められたいのなら、此處で今生命を棄てるがいい。それとも、海へ身を投げるか、二つに一つだ——』

と云ひました。

歌ひ手は落ちついて、

『何故、私は死なければならないのですか。私の黄金なら、みんな貴方がたにあげます。』

と云ひました。水夫達は、

『死人に口無しだ。お前を生かして置けば、此の事が王様の耳に這入る、すると私達はつかまる、さうなりあ黄金をとつても役には立たない。お前が生きてゐなければ、何にも分らずに濟むのだ。』

と云つて、歌ひ手の身近くへつめよりました。

四

歌ひ手は少しも騒がずに、

『それでは一つお頼みしたいことがあります。どうしても私が死ぬのなら、歌ひ手らしく死なして下さい。私は歌をうたつてこの日まで生きて來たのですから、今最後の一ふしを歌はせて下さい。私の歌がすみ、立琴の音がやんだら、私はきつと生命を棄てます。』

と申しました。

氣の荒い船乘りたちには、あはれみの心はありませんでしたが、こんな偉ひ歌ひ手の歌を聽くのは面白いと思ひました。そこで、水夫達は、

『お前の思ひ通りにさせてやる。』

と云ひました。歌ひ手は、

『では、私は着物をきかへます。歌うたひの着物をきないと、歌の神様が聽いて下さらないのですから。』

と云ひました。

アライオンは金絲で刺繍をした紫色の長上着をきました。それから髪には香水をつけ、耳には黄金色の輪をはめ、手首には腕輪を飾りました。

いよ〳〵歌ひ手は左手に立琴を持つて、右手でその絃をはじき出しました。

水夫達は、歌ひ手が立派な姿になつたのを見て面白がりました。

歌ひ手は、船の舳先へ行つて、青い海を見下ろしました。

銀の鈴を鳴らすやうな歌が、静かに海の上に響きます。空にも、水にも音がなく、何もかも静まり返つた船の上に、絃につれて咽喉を出る美しい聲は、此の世をひとりで背負つて立つてゐるやうです。

水夫達は首をたれて、醉つたやうになりました。

絃の音も、歌の聲もやんだかと思ふと、歌ひ手は水の中にざぶんと飛び込みました。

五

水夫達はわけもなく事が運んだのを嬉しがりました

歌ひ手が居なくなつて、水夫達は黄金を手に入れる事が出來たのです。歌ひ手は、ふと船端をすべつて、海に落ちたと云つても、誰に分りませう？

『早く漕げ、早く逃げろ。』

と水夫達は一生懸命に、一時も早くこの場を離れて、船を陸へつけやうとしたのです。

ですから、その時水の中で、どんなことが始まつてゐたか、水夫達には少も分りませんでした。

六

アライオンが歌をうたつてゐた時に、魚やその外色々な海の動物が、美しい歌を聽きに集まつて來たのでした。歌ひ手が水の中に飛び込むと、下は一杯の動物で、どれもこれも歌ひ手を助けようと、身近く寄つて來ました。

その中に、一匹の強い大きな海豚がゐました。

海豚は、

『どうぞ、お乘り下さい。』

と言はないばかりに、その平たい背中を、歌ひ手の方へ向けました。

歌ひ手は、心の中に、

『これは乘れといふつもりだな。』

と思つて、直ぐと海豚の背中に乘りました。

海豚は心持ちよささうに、水の上へ浮んで矢のやうに海を泳ぎました。そのおかげで、歌ひ手は無事に陸へ上ることが出來たのです。

七

歌ひ手は、それから旅を續けて、間もなく都へ着きました。そこで早速立琴を持つて御殿へ行き王様にお目にかかりました。

アライオンは、王様の前に進み出て、

『王様、私は偉い譽れを得て戻つてまゐりましたが、今は着のみ着のまま、一文なしでございます。』

と申し上げました。王様は驚いて、

『名をあげたのは嬉しいが、貧しい身の上となつたといふのはどうした事か、包まず話すがいい。』

と仰しやいました。歌ひ手は、

『私は歌くらべに一番の褒美をもらひましたが、その黄金はみんな泥棒にとられて仕舞ひました。』

と、船の上であつたことを、殘らず王様にお話しいたしました。王様は益々驚いて、

『私には惡い者をこらす力がある。いい様に取計らつてやる。きつと今にあの船に乘つた水夫共が歸つて來ようから、それまでは何もかも内密にして置け。』

と云はれました。

八

それから間もなく、歌ひ手の乘つた船が、港へ入つて來ました。

王様は、家來を港へやつて、水夫達を御殿へお呼になりました。

水夫達が御殿へ來ると、王様は、

『アライオンはどうした。何處にゐる？』

とお訊ねになりました。

水夫達は、誰もかも、知らぬ顔をして、默つてをりました。王様は前よりも大きな聲で、

『お前達はひとりもあの歌ひ手の噂を聞かないのか。あれは私の仲好しだ。アライオンがこの都へ歸つて來るのを私は待つてゐる。』

と仰しやいました。

水夫の一人は、濟ました顔で、

『私共は、タレンタムといふところで、あの歌ひ手に別れて參りましたが、たしかに、其處では無事に暮らしてをりました。』

と申し上げました。王様は、

『それは本當か？ 間違ひあるまいな。』

と念を押されました。外の水夫達は、口を揃へて、

『本當でございます。間違ひは御座いませぬ。』と云ひ放ちました。

九

その時不意にアライオンが現はれたのです。船から身を投げた時の着物をきて、その歌ひ手は、水夫達の目の前に出て來たのです。

歌ひ手を見ると、水夫達は誰しも下を向いてしまひました。水夫達は、思はず知らず、

『あれは、神様だ。殺してしまつたのに、生きてゐる筈はない。』と云ひました。王様は、

『お前達は あの偉い歌ひ手を殺さうとしたけれど、神様は、あの人を助けずにはゐなかつた。この惡い水夫ども何處へなりと、行つてしまふがいい。』と云はれました。アライオンは王様に、

『あの人達は、私を亡い者にしようとしましたが神様のお助けで私は斯うして都へ歸ることが出來ました。どうぞ、あの人達を許してやつて下さいまし。』と、情ぶかい願ひを申し出ましたが、

『あなたが無事でゐることが出來たにしても、私は惡い人間を罰せずにはゐられない。』

と王様は、仰しやつて、水夫達を遠い島へ、島流しになさいました。（全付り）

牛千疋

齋藤佐次郎

ある町に大金持ちの商人がゐました。

お天氣のいゝ夏のはじめの頃でした。商人は町を出て、街道をのこ〳〵と隣町の方まで行きました。すると、途中で同じ途を行く一人の見なれない、お百姓にあひました。

商人は、大層慾張りな男でした。しかし、その日は何もお金もうけにありつかなかつたので、がつかりしてゐたのです。處へお百姓に會たものですから、急に元氣になつて

「一つ、あいつを攫へて　金もうけをしてやらう。」

と、思ひ付いた商人は早速に、お百姓の後を追ひました。

商人とお百姓は、お互ひに挨拶をしました。そして、すぐと道づれになりました。

「お百姓さん、私はお前さんにあふまでは、この道が遠くて〳〵實にくさ〳〵してゐたんだよ。だが、途づれが出來てよかつた。急に道が近くなつた樣な氣がする。」

と、商人がいひました。

「それはどうも恐れ入ります。」とお百姓もいひました。「しかし、かうして道づれにはなりましても、あんたの樣な町の方には、百姓の話す事はどうせ樣でもない事だから面白くもありますまい。」

「そういへば、まアそうだが、しかし、私にいゝ考へがあるんだ。」商人は急に元氣になりました。「お互ひにありふれた話をした處が面白くもないから、どうだね、二人の頭で考へられるだけの大法螺を吹き合つて歩かうぢやあないか。そうして、相手の話を嘘だと疑つたものが、千圓拂ふ事にきめやうぢないかね。」

お百姓は暫く考へ込んでゐましたが、やがて承知しました。そして、商人に「どうぞ、是非あなたから始めて下さい。」と頼みました。お百姓はその時、かう思ひました。「商人がどんな大法螺を吹いても、決して、それが嘘だといふやうな樣子をしまい」と、そう決心しました。

そこで、商人が先づはじめました。

「ある日の事、私はこの道をどん〳〵と行つたのだ。すると、途中で牛を澤山々々ひいて來る牛飼に遇つた。——」

「成程、——私もいつかそんなのを見ましたよ。」

と、お百姓もいひました。

「それがね、お前さん、五疋や十疋ぢやないんだよ、皆んなで、千疋ゐたんだ。しかも、一疋一疋と、鼻づらへ通した手綱を前の牛の後尾へつないであるんだ。だから、三里の間といふもの、すらりと帶の樣に牛の行列さ——」

「成程ッ」と、お百姓が、またいひました。

「するとだ。一羽の鷲が、すーッと空から飛び降りて來て眞先きの牛をひつさらふが早いか、逃げて行つて了つたのさ。處が牛はどれもこれも、一つにつないであるので、千疋の牛が殘らず皆な持つて行かれて了つたのだ。」

「すばらしいもんですな。素敵な力ですなア。……しかし、成程……成程……いやその通りでせうとも、牛は千疋でしたな、……フン、成程。それから牛はどうなりましたね。」

「……お前さんは、嘘だと思はないのかい。」

商人が待ち兼ねてゐる樣にきゝました。

「ヘエ、どういたしまして、——」お百姓は、落ちついていひました。

「よろしい。それぢや、その先きを話すとしよう。これからが大變なのだ——丁度その時、隣國のお姫樣がお庭へ出

て、侍女に髪をとかさしておるでになつたのだ。その時お姫様は何氣なく、空を見上げなさつた。と、丁度そこを、鷲が獲物をひつ掴んで行くぢやないか。お姫様は、あつけにとられて、眺めてゐたよ。……その時だ。今まで、ぢつとしてゐた牛が、俄かに暴れ出したのだ。流石の鷲も、千疋の牛に暴れられちやあ敵はないや。ひつ掴んでゐた牛を離して了つたから、さア大事だ。千疋の牛が、ど、ど、どッと、一度に舞落ちて來て、まつしぐらにお姫様の左の眼の中に入つて了つたのだ。——』

『お氣の毒な事になア。さぞ痛かつたらうな。眼の中へ何が入つても、堪りませんからなア。』

と、お百姓が同情するやうに言ひました。

『そうだともね。』商人はこゝだとばかり、夢中になつて話しつゞけます。『お姫様はッイと立上つたよ。手で眼を押へながらね。『まア、何か眼へ入つたやうだ。何んて痛んでせう』つて、お姫様がおつしやつた。』

『そりやア、そうですとも、それに違ひない。

で、それから先きは、どうなりましたね。』

『お姫様の聲を聞きつけて、侍女がお傍へとんで來たよ。私にお見せ遊せ、といつて、侍女が痛がつてゐるお姫様の眼蓋を一寸開かせたよ。するとね、どうだい。牛が一疋飛出して來たぢやないか。侍女は直ぐ樣、ひつつかんで、袂の中へ入れて了つた。——』（この時、お百姓が退屈そうに、「ア、ア、ア、」といひました。しかし、商人はやつきになつて話し續けます。）——それから侍女は、一疋々々と、千疋の牛をのこらず掴み出して、袂の中へ、入れて了つたよ。——』

こゝまで話して來た時、商人は息切れがしたといふ樣に

ハア〳〵言ひ出しました。しかし、お百姓の方は平氣で商人の方を見ながら、また

『成程なア。』と、いひました。

『あゝもう、これ以上は私の頭から出ない。もうこれで、話はお仕舞ひだ。お前さん、この話をどう思ふね。』と、商人がきゝました。

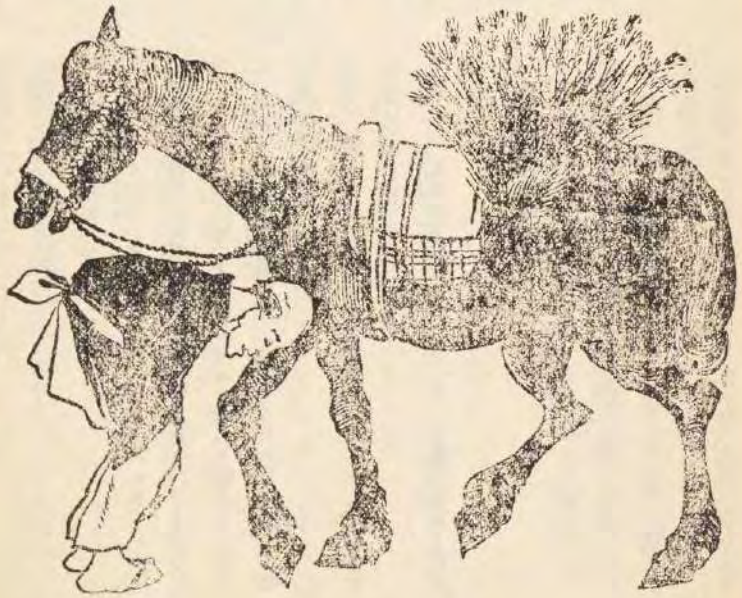
『不思議な話ですな。が、全く本當らしい話ですな。』と、お百姓がいひました。

『フーン、それぢや仕方がない。今度はお前さんの番だ。』商人はがつかりして了ひました。『お前さんの話を早く聽きたいな。さぞ、面白いに違ひないだらう。』

『ヘエ、私も面白いだらうと思ふんです。』

かういつて、お百姓が次の樣な話をしました。

『私の親父といふのは素敵もねエ大金持でしたよ。何しろ馬を五十疋、牛を三十疋、羊を百疋も持つてゐたんですからな。だが、親父はその



中で、一疋の牝馬を一番可愛がつてゐましたよ。何しろ、その馬は實に溫順で、――おまけに、えらく綺麗な奴でしたからな。」

「フン、それから。」

と、商人が催促しました。

「今、話しますよ。そう急ちやいけませんよ。……さて、親父はその牝馬に、壞れた鞍をつけて市場へ行つたんです處が、鞍が悪かつたせいで、馬の背中に擦傷を出來しました。家へ歸つて來た頃には、もうその傷があんたの掌程にも大きくなつてゐたんです。」

「フーン、そして、それからどうしたね。」

商人は、待ち切れないやうに、また言ひました。

「丁度、その時は六月でしたよ。ご存知でせうが、六月といふ月は濕氣を含んだ塵埃が、旋風の樣に吹いて來るんです。だから堪つたもんぢやありませんや。可哀さうに、牝馬の背中の傷は塵埃で一ぱいになつて了ひましたよ。おまけに、塵埃の中には、麥の粒が混つてゐたのです。濕氣は十分だし、それへお日樣がかん〳〵照りつけたので、忽ち麥が芽をふいて了つたんです。」

「面白い事になつたなア」

と、商人もいひました。

「いや、全く面白い事になつたんです。それからといふもの、牝馬の背中に見渡す限りの麥畑が出來たのです。そして、それが直きに實つて、穗が房々と垂れる程になりました。早速五十人も人を傭つて、刈取らなければならないといふ有樣です。」

「だが、誰でも、收獲には人手を餘計頼むものだ。」商人がまた口を出しました。

「それで、牝馬の背中からやす〳〵と、千俵の麥がとれましたよ。」

「えらく取れたもんだな。」

「その時でした。あんたのお父さんが、十日も飯を食べない樣な姿をして、ひよろ〳〵と私の親父の處へやつて來たんです。まア、その時の有樣つたらありませんや。泣かないばかりに手を合せて、頼むぢやありませんか。――」

商人は、妙な事を言ひ出したもんだと、あつけにとられてゐましたが、その内に、見る〳〵こわい顏になつて來ました。

『あんたのお父さんが、こんな事をいひましたつけ。「こゝ一週間ばかりといふもの、何にも食べてゐません。どうぞ、旦那樣、お願ひでございます。お宅樣のお麥を一俵だけお貸しなすつて下さいまし。早速お返しいたしますから。」つて、こんな事をく、どく〳〵と言ふんです。すると、私の親父は、極く慈悲深い男だつたもんだから、「いゝとも、いゝとも、いるだけ持つて行きな。返すのは何時でもいゝからな。」と、いひましたよ。」

商人は、眞赤になつて怒り乍ら、唇をかみしめてゐました。しかしぢつと辛抱して、

「それから――」

と、ふるへ聲でいひました。

「それから、あんたのお父さんは、麥を持つて歸りましたよ。處が、何んて恥かきなこつてせう。持つて行つた麥未だに返さないんです。それで、私は今も思案してゐるんです。いつそう、裁判所へ持ち出さうかと思ひましてね。」

お百姓はこゝまで話して、にや〳〵嘲ける樣に笑ひながら、商人を見詰めました。

商人は、とう〳〵我慢が出來なくなりました。

「馬鹿ー嘘をつけッ、……訴へるなら、訴へて見ろ、さアどうするか、言へ、言へ……」

商人は夢中で怒鳴りました。

しかし、お百姓の方は平氣なもので、

「なに、もう言ふ事はありませんや。私の話もこれでお終ひでさ。……さアお約束の千圓を下さい。」

と、いひました。

商人は急に氣拔けがして了ひました。狐につまされた樣に、きよとんと突立つてゐました。そして今しがた、

「嘘をつけッ」

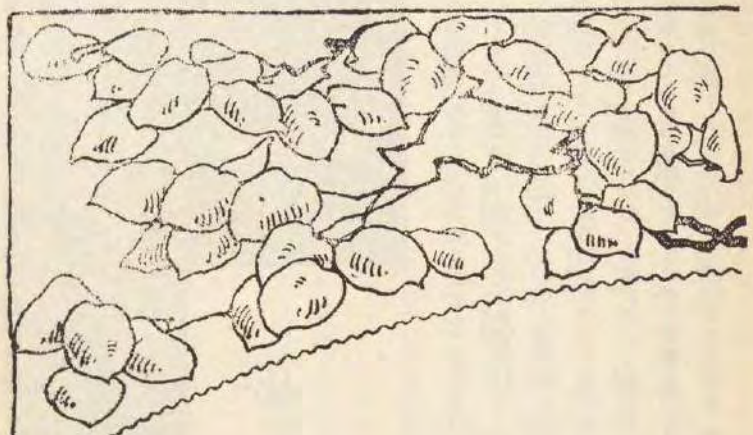
と怒鳴つた事を果出して、眞赤な顏が、急に青くなつて了ひました。

商人はとう〳〵千圓とられて了ひました。（をはり）

烏のお灸（推奨童謡）

宇佐美柳雨

烏の小父さん
柿の木で
大きなびらを書いてゐた。
悪口する子の口ばたへ



お灸を燒くぞと
書いてゐた。
烏の小母さん下駄はいて
町へもぐさを
買ひに來た。
夕燒雲の赤いのに
赤いもぐさを
買つてつた。

花火

後藤末雄

いつ頃の話であるか、私は知りません。さほど古い話ではないでせう。佛蘭西の片田舎にある豪農が住んで居りました。先祖は中世紀の貴族で、庫の中には黄金の兜や、銀の楯を始めとして、珍らしい寶物が山のやうに這入つて居りました。併し家族としては、お祖父さんと兩親と、獨り息子のロベールがある許りでした。殊に御祖父さんが大そう慈悲深い人でしたから、村の人達は此の一家を、尊敬しました。

丁度御祖父さんが六十歳を迎へた年の春、ある王樣の戴冠式が巴里であげられる事になりました。その噂が草深い田舎まで傳つて、野良から鍬を捨いで歸る人も、牧場から牛乳を搾つて歸る娘も、戴冠式の話でもち切りでした。

『巴里へいきたいな。戴冠式の御祭りを見たいな。』と村の人達は、遠い〳〵巴里の空に憧れて居りました。

豪農の家の御祖父さんは幸ひ達者でしたから、この戴冠式を一生の思出にしようとして、巴里をさして出發しました。

その時、可愛い孫のロベールを一緒につれて往きました。戴冠式の前日、二人は遂に巴里に着きました。無論、この田舎者には、見るもの、聞くものが、總て驚きと歎びでした。其時、七歳の子供であつたロベールの眼を、最も驚かしたものは、華麗な王樣や、ノートル、ダームの怪像や、市街の賑ひではありませんでした。御大典の前夜から打ち揚げる花火でした。日本でいへば、柳、星下り、五彩の鈎火が赤から紫に、黄から青に變つて、暗夜の空に消えて往きました。そしてロベールは花火の揚がる度毎に、小さい手をうちながら、其の行方を見守つて居りました。

『御祖父さん。あれは何んといふものなの……』

御祖父さんは暫く考へ込んで居りましたが、綺麗な着物を着たそばの女にかう尋ねました。

『失禮ですが、あれは何んと申すものでございます。』

花火ですよ。』

都の女は嘲る樣な顏をして答へました。祖父さんとロベールは、初めて花火といふ言葉を知りました。また初めて花火といふ物を見たのでした。

そのうちに御祭は無事にすみました。巴里人は又、セッセと働き出しました。そして御祖父さんとロベールとは、場末のホテルから出發しました。二人は山を越え、谷を渡つて、故郷の山里へ歸つて來ました。

『お母さん。花火を知つてるかい。』といふ質問は、久し振りで母親の接吻を受けた時、ロベールのいつた言葉でした。

『花火……お母さんは知りません。』

『そりや綺麗だよ。日よりも月よりも綺麗だよ。』

ロベールは小さい腦髓のゆるす限り、母親に花火の說明をしました。併し母親は花火といふものを想像する事さへ出來ませんでした。村の人達は王樣の戴冠式の御祭を見物に往つた仲間の土產話をききに集りました。ロベールは彼等に一人づゝ、花火のことを尋ねましたが、誰も知りませんでした。村中の物識りといはれる敎會の牧師にも尋ねましたが、牧師はたゞ白い髯を握りながら、小首を傾けて居りました。其故、子供は大そう得意になつて、花火の美しさを說明してゐたのでした。

實際、巴里で見てきた花火は、少年のロベールに取つては、毎日見飽れた曙の色、淡い〳〵野末の色や、山の端を染める入日よりも美しかつたのでした。また薄紫の夕空よりも、流れ星よりも綺麗に思はれたのでした。

或る日、教會の歸りがけに、ロベールは牧師に向つてかう尋ねました。

「牧師さま。花火よりも綺麗なものはありませんね。」

「さあ……」と牧師は氣のない返事をしました。

「何うしたら花火が出來ませう。」

「……。」

牧師さんは暫く考へ込んで居りましたが、

「あれはね、聖書の中に出てくる奇蹟といふものです。神樣でなければ出來ません。」と申しました。

「それぢや王樣の御祭には、奇蹟が起るの……。」

「えゝ。」と牧師は肯きました。

子供は奇蹟だと聞きますと、對へ、花火は新しいものだと思ひました。併し新約聖書の中には、花火に關する奇蹟の話は少しも載てゐませんでした。また、聖書の中にも、

花火の事は載つてありませんでした。教會の牧師も淑して、花火の奇蹟に就いて詭辯したことはありませんでした。

併しロベールは跪いて、「我が主、イエス樣、どうぞ花火の奇蹟を御見せ下さいまし。」と毎朝、祈つて居りました。そして夜はこの御祈りを捧げなければ、小さい寢臺の中に、這入りませんでした。ロベールの夢に現はれたものも、矢張り花火のことばかりでした。

そのうちに何時か二年ばかりたつて往きました。併し花火を見ることは出來ませんでした。花火の奇蹟が現はれなかつたのです。

「牧師さま、どうして花火の奇蹟が起らないでせう。」

「もつと神樣に御祈りなさい。まだ信仰が足りません。」と牧師が答へました。

ロベールは朝晩、御祈りを缺かした事はありませんでした。猶、寒い〳〵冬の日、人知れず教會の石段の前に跪いて、「神樣、どうぞ花火の奇蹟を御見せ下さいませ。」と御願ひしながら、額を地面にあてゝ居りました。併し花火の奇蹟は現はれませんでした。

或日、お父さんとお母さんとは、隣村の親戚に不幸があゆましたので、御通夜に往かなければなりませんでした。家には御祖父さんとロベールが殘つて居りました。その夜ロベールは御祖父さんと一緒に、小さい寢臺に睡らなければなりませんでした。「神樣、もう一度、花火を御見せ下さいませ。」とロベールは御祈りを捧げてから、御祖父さんの接吻を受けて、寢臺に這入りました。

もう春の夜でした。窓には薄い月の光がさしこんで、窓硝子が曙のやうに白んで居りました。遠くに蛙の鳴聲が聞えて居りました。そして枕許には小さいランプがついて居りました。ロベールは睡られませんでした。隣村に出掛けたお父さんお母さんの事を考へると、妙に淋しい氣がしてきました。併しそばに御祖父さんが睡て居ました。ロベールは御祖父さんと二年前、巴里に往つた事を考へ出しました。すると花火の記憶が、青や赤や紫の色と一緒に、眼の前に出て來て、ボーンと破裂する音さへ、耳にひゞいて來ました。ロベールは知らず識らず

「御祖父さん、御祖父さん。」と呼んで見ましたが、御祖父

さんは答へませんでした。こして微かな寝息が聞えてゐました。

その時、ロベールは何氣なく枕許のランプを見詰めました。すると此の焔が花火のやうに思はれました。そして見つめれば見つめるほど、小さい焔の中から、青や、赤や、黄ろい光りを見分けることが出來たのでした。

『あゝ、これが花火の種だ。』

とロベールは叫びました。すると何んとも言へない歡びが胸に溢れて來ました。

到頭ロベールは起き上つて、寢臺から降りました。そして身長伸びをして、小さいランプを手にすると、寢室の戸をあけて、外に出ました。

少し風が吹いて居ました。ランプの焔が瞬くと、油の臭ひが鼻にしみました。彼はランプのホヤに手をかざしながら、裏手の庭まで出てきました。すると『夜の番人』らしい樣子をしてゐた犬が、

『ワン』

と吠えましたが、ロベールだと知ると、安心したやうに尾許にすり寄りました。併しロベールは、犬の頸をなでてやるほど、氣が落ち着いて居りませんでした。彼はスタスタ納屋を指して、歩いて往きました。犬は煙草の臭ひに咽せて、頻りに噎をして居ました。

ロベールは納屋から枯草を引き出しました。そして其の上にランプの火を移しました。石油がこぼれて、枯草から青や、赤い火が燃え出しました。

『花火だ。花火のやうだ。嬉しいな。』

とロベールは歡び勇んで居りました。そしてドン〳〵枯草を燃べました。

森の上には　滿月がかゝつて居りました。春の夜風が、そよ〳〵吹いて居りました。ロベールは焔の渦巻を眺めながら、歡んでゐた間に、納屋の中に、火が移つて往きました。

皆さん、その後、起つた火事の御話は申しあげるに及びません。到頭、火事はロベールの家を灰にしたあとで、翌朝、消えました。

お父さんとお母さんとは一晩、山路を駆け駆けて歸つてきました。そして息切れをしながら、まづ見たものは、自分の家が一夜のうちに灰となつた廢墟でした。ロベールは眞青な顔をして、灰と水との間から、折々、燃えあがる青い焔を見つめて居ました。まだ村の人達は、總掛りで、働いて居りました。すると彼等の一人が、ロベールを指しながら、かう言ひました。

『私は見て居ました。この子が火をつけたのです。ランプで納屋に火を點けたのです。』

阿母さんは信じませんでした。そして村人の中傷を嘲けるやうな樣子で、

『お前が本當に火をつけたのですか。』とロベールに訊ねました。

『あゝ』と少年は肯きました。父親の顔色は變りました。そして母親は『あゝ神樣、神樣。』と狂者のやうに叫んで、よろめきながら、地面に倒れて了ひました。ロベールは花やり立つて居りました。流石に顔色が土の色に變りました。

『阿母さん、阿母さん、勘忍して下さい。私が悪

かつたのです。」とロベールは泣き伏して母親に取り縋りました。惇朴な村の人達は、目を素向けずには居られませんでした。

その時、牧師が教會から來ました。そして泣き狂ふ母親を宥め、少年の手を取りながら、かう尋ねました。

「本當に御前が火を附けたのかね。」

「いゝえ、私は火を付ける積りはありませんでした。もう一度花火が見度かつたのです。花火の奇蹟が見たかつたのです。」

とロベールが答へました。

其時、牧師の眼が異様に輝いて、牧師は、俯向いて了ひました。

人々は默つて顔を見合はしました。突然、犬が吠え出しました。そして意味ありげに人の顔を見廻しては、妙に悲しい吠聲を致しました。人々は其の方に目を注ぎました。燒殘りや灰の中から、死骸が見えました。それは御祖父さんの死骸でした。その惨狀は目も當てられませんでした。

「御祖父さん〳〵」

と叫んで倒れて了ひました。

そして燒け爛れた死骸から、また青い焰と、何んとも言へない臭氣が發散して居ました。母親は身體中をふる〳〵顫はせながら、兩手を擧げて、苦悶して居ました。村の人達は唯、俯向いて居りました。

そのうちに村役場から巡査が來ました。そして泣いてゐる少年のロベールに繩を掛けて、

「さあ、歩け。」

と引き立てました。母親は巡査の手に縋りました。父親も縋ひました、村人も縋みました。併し巡査は聽きませんでした。巡査は、泣きながら縋りつく母親の手を振り拂ひました。

「さあ、歩け、歩かないと聽かないぞ。」と巡査は怒鳴り出しました。

ロベールは悄然として、繩に繋がれながら、其場から引き立てられて往きました。そして暗い、冷い處へ入れられて了ひました。

程なく少年は最も近い都會に護送されました そして裁判に附せられました。殺人、强盜犯の被告の後から、法廷に這入てきたのは、可愛らしい少年のロベールでした。傍聽席は、どよめきました。裁判官は、此可愛らしい子供が放火犯の罪人だと、認める事が出來ないやうでした。

「お前はどうして火事を出したのですか。」

「私はもう一度、花火が見度かつたのでした。」

ロベールは自分のした事を殘らず白狀しました。傍聽席には嗚り泣きの聲が聞えました。

併しその頃の佛國の法律は、ごく不完全でした。ただ形式の上からこの小さい被告を裁判して、一年間牢屋へ入れるといふ事になりました。

到頭、ロベールは懲役人の着る着物に着替へて、牢屋に繋がれました。そして折々、母親が遠い山里から面會にきて、差入物をするばかりでした。併しその冬、この小さい罪人は、暗い冷い處で、病死して了ひました。（をはり）

蛇の足

よそから到來もののお菓子が一つ殘つてゐました。庭には子供が五六人遊んでゐました。

『みんなで畫を描いて、早く描いたものにお菓子を上げよう。』とをぢさんはいひました。

子供たちはせつせと地べたに蛇の畫を描きはじめました。その中で一人一番早く描き上げてしまつた子が、

『みんな隨分おそい人だなあ。僕はすつかり蛇を描いてしまつて、おまけに二本足まで描いたんだぜ。』と得意らしくいひながら、お菓子に手を出さうとしました。

けれど、をぢさんは手をふつて、

『いけない、いけない。蛇には足が無いはずだ。お前の畫は蛇の畫ではないよ。』

といつて、その子にお菓子をやりませんでした。

だからやり過ぎてしくじることを「蛇の足を描く」といふのです。（楠山正雄）

鷄盜坊

毎日一羽づゝ隣の家の鷄を盜む男がありました。隣の主人がおこつて小言をいふと、その男は頭を掻きながら

『へい、へい。御免下さい。これからは決して毎日は盜みません。月に一羽だけ盜むことにしませう。さうして來年になつたら一羽も盜まないことにしませう。』

といひました。

惡いと知つてもすぐと綺麗に、やめてしまうことはなか〳〵できないものです。（楠山正雄）

一の谷の合戰（歴史童話）

篷田空穂

七

鵯越へ向つた義經に隨つて、熊谷直實、平山季重の二人の大將もゐました。山の上で夜を明すことになつた六日の夜中のことです。直實は一しよに連れて來た子息の小次郎を呼んで云ひました。

『此方の勢はかういふ難所を進むのだから、誰が先、誰が後といふ順序はないわけだ。先陣は仕勝手だ。何うだ、あの土肥がいひつかつて向つた西の口（搦手）の方へ廻つて、一の谷の先陣をしようぢやないか。』

『御尤です、私もさう申上げようと思つてゐました。では急いで參りませう。』

小次郎がさう云ふと、熊谷は出懸けようとしましたが、心附いて、家來に云ひました。

『さうだ、この勢には平山もゐた。あの男も同じやうなことを考へてゐるかも知れん。俺は共同の軍をすることは嫌ひだ。行つて、あの男の樣子を見て來い。』

熊谷の家來が見に行くと、平山は思つた通りに、もう一あし先へ出懸けてゐました。そして平山は獨語に『人は何うするか知らんが、この季重は、一歩も後へは引かんぞ、決して引かんぞ』と云つてゐます。又平山の家來は馬に秣を食はせてゐたが、馬がいつまでも長食ひをしてゐるので腹を立てゝ『憎らしい程長食ひをしやがる』と云つて打つと、平山はそれを止めて、『そんなことはするな、その馬も今夜ぎりの齋命だから』と云つて、そして皆で出懸けました。

それを見て熊谷の家來は、走つて歸つて來て、そのことを知らせると、

『さうだらうと思つた。』

と云つて、熊谷も續いて出懸けました。

熊谷は子息の小次郎と旗持と三人でした。明日は惣勢がそこを下りようとする谷を左手に見て、右手の方へと馬を進ませて、一の谷の下の海岸へと出ました。そこには土肥實平が七千餘騎で控へて、夜明けを待つてゐました。熊谷はその陣の側を、闇にまぎれてそつと通りぬけて、一の谷の西の木戸口へ來ました。

『多分大勢の者が、先陣をしようと思つてこの邊まで來て夜の明けるのを待つてゐるだらう。どら、名乘をしておかう。』

熊谷は小次郎にさう云つて、大聲を擧げて、

『武藏の國の住人、熊谷直實、子息の小次郎直家、一の谷の先陣だぞ。』

と云ひました。城の中の者はそれを聞いたが、『相手にならずに、矢を射らせてしまへ』といつて、靜まりかへつてゐました。

暫くすると、うしろの方から武者が二騎あらはれて來ました。

『誰だ。』

と熊谷が尋ると、

「季重だ。さういふのは誰だ。」

「直實だ。」

「さうか、何時から來てゐる。」

「背のうちからだ。」

「私も餘り遲れなくて來られる所だつたのを、途中で馬鹿な目に逢つてしまつて、殘念をした。」

その中に東の空がしら〳〵と明るくなつて來て、七日の朝となつた。

熊谷は心の中で、平山の聞いてゐるところで、もう一度名乘をしようと思つて、

「前にも名乘つたが、武藏の國の住人、熊谷直實、子息の小次郎直家、一の谷の先陣だぞ。」

と名乘りました。それを聞いた城の中の者は、

「後つぴて名乘をしてゐる憎い熊谷父子の者を生擒にしてやれ。」

と云つて、惡七兵衛景清など平家の大將三人と、家來と一しよになつて、二十人ばかりの者が、揃めてあつた水戸

を開けて駈け出して來ました。

此方は五人でした。平山は、

「保元・平治の二度の軍に、先陣をして手柄を立てた平山季重だぞ。」

と名乘をあげて、進んで戰ふと、熊谷父子の者がそれに續いて、

「熊谷小次郎直家、生年十六歲。」

と名乘つて進みました。五人はべり代り立ち代りして、刀から火花の出る程に戰ふと、平家の方は、叶はないと思つてか、一しよに城の中へ入つてしまひました。

その間で、熊谷は、乘つてゐた馬の腹を射られてしまつたので、馬から下りて立つてゐました。小次郎は左の手の肘を射られたので、此れも馬から下りて、父と並んで立つてゐました。

「小次郎手疵をうけたのか。」

「え、。」

「鎧の着方をよくして、矢の通らないやうにしろ。冑を深くかぶれ、頭が射られるな。」

熊谷はさう教へて、自分の鎧にさゝつてゐる矢を抜きすてると、城の中を睨んで大聲で罵りました。

「さあ、誰でも、俺はと思ふ者は出て來て、熊谷父子の者と組打をしろ。強いといはれる越中次郎兵衛は居ないのか、惡七兵衛は居ないのか。」

さう云はれると越中次郎兵衛盛綱は城の中から出て、熊谷父子の者を目がけて馬を進めて來ました。父子の者は、間を割られまいとして、押並んで刀を振りかぶつて、これも進み寄りました。次郎兵衛は勢氣がついて引返すと、惡七兵衛が口惜しがつて、代つて戰はうとしたりなぞしました。

此方の平山季重は、大事に思つてゐた家來を、今の戰で討取られてしまつたので、口惜しがつて、一人で城の中へ駈け込んで行き、討つた者の首を揚げて引返して來ました。

平家は城の中へ籠つて、「射取つてしまへ、射取つてしまへ」といつて、四人を目がけて盡んに矢を放つて來ました。

八

これは搦手の方のことですが、一方の大手の方の、生田

の森には、[illegible]が鎌大將となつて五萬餘騎で控へてゐる、夜が明けたらば戰を始めようとしてゐました。

その勢の中に武藏の者で、河原太郎、次郎といふ兄弟の侍がゐました。兄の太郎は弟の次郎に向つて云ひますには、

「大名は自分で働かなくても、家來が働くので

それを自分の手柄にする。俺たちは自分で働くより外はない。かうして敵を目の前に見てゐながら、矢一筋射すにゐるといふのは、いかにも焦れつたいから、俺は城の中へ紛れ込んで、一矢でもいゝから射ようと思ふ。だが、萬に一つも生きては還れまい。お前は殘つてゐて、家がさうした事の證人に立つて呉れ。」

さういふと、弟の次郎は涙をぱら〳〵とこぼしました。

『私たちは、二人ぎりの兄弟です。兄さんを討たせて、私が一人で殘つて居たつて、何の面白いことがあるものでせう。別々に討死する位なら、一しよにしませう。』

二人は馬を棄て、弓を杖について、敵の城へ向つて進んで行きました。まだ夜が明けきらないので、星明りで二人の姿は見えるものゝ、鎧の色などははつきりしませんでした。

二人は城の中へ入ると、大聲で名乘をあげました。

『武藏の國の住人、河原太郎高直、同じく次郎ぬ直、生田の森の先陣だぞ。』

城の中にゐた平家は、それを聞くと、

『東國の武士といふものは何といふ怖しいものだらう。この大勢の中へ、兄弟だつた二人で入つたからとて何ができよう。手を出すな。ほふつて見てゐろ。』

さう云つて、手を出さうとする者もありませんでした。兄弟の者は、何れも弓の上手なので、盛んに射かけました。城の中では、

『もう見ては居られん、討て。』

と云ひますと、西國での弓の上手といはれてゐる備中の眞名邊四郎、五郎といふ兄弟の、その弟の五郎が、覘ひを定めて、弓を十分に引いて放ちました。その矢は河原太郎の胸に中つて、背中の方まで射拔きました。太郎は弓を杖にしながら其所へすくむと、弟の次郎は、兄を肩に懸けて引返しました。眞名邊は、次の矢で弟を射ました。兄弟は重なり合つて倒れました。

眞名邊の家來は走つて來て、兄弟の首を取つて、大將の平知盛の前へ持つて行きました。

九

河原の家來の者は主人が討たれたのを見ると、あらこち

へ散らばつて喚き立てました。
「河原殿御兄弟は、唯今城の中へ先陣をして討死されました。」
それを聞きつけたのは、梶原平三景時でした。景時は、源太、平次、三郎の三人の子息を連れて、五百餘騎を控へてゐるのでした。
「河原兄弟を討たせたのは我等の油斷だつた。時刻はいゝ、そら攻め懸れ。」
と云つて、五百餘騎で喚き立てゝ城へ寄せました。
梶原の三人の子息の中で、次男の平次は、自分こそ先陣をしようと思つて、惣勢からずつと先へ立つて進んで行きました。
父の景時はあぶなく思つて、使

を遣つて、
「後の續かないやうな先懸はしても、褒美は出さないと、大將からの仰せだぞ。」
と注意をすると、平次はちよつと考へて、
「武士の取り傳へたる梓弓、引きては人の返すものかは。」
かう申上げて呉れ。」
と歌を詠んで返事をして、進み續けました。
平次に後れまいとして進んだ梶原の五百餘騎は、敵の大勢の中へ駈け入つて、盛んに戰つて、一と先づ引上げました。見るとその中に、兄の源太が見えませんでした。
「源太は何うした。」と景時が家來に訊くと、家來は、
「深入りをし過ぎて、討たれておしまひになつたかも知れません。奥の方まで見ましたが、見えません。」
さう聞くと景時はは[illegible]と涙を落しまして、
「先陣して手柄を立てようと思ふのも子供の爲だ。源太を討たせて、俺が生きてゐたからとて何うしよう。引返せ。」
景時は直ぐに又敵の中へ攻め入りました。そして、戰ひながらも駈け廻つて捜すと、源太は馬を射られて徒歩になり、胄も落されてもまつて、一丈ばどある崖を後にして、家來二人と一しよに、敵の五人を相手に戰つてゐるのを見附けました。景時は喜んで、
「源太、景時が此所にゐるぞ。死ぬにも卑怯な死に方はするな。」と云つて、寄合つて戰つて、敵の三人を殺し、二人に疵を負はせました。

十

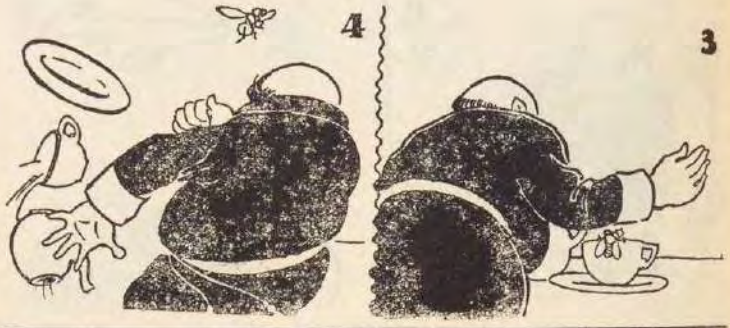
七日の明方、義經が鵯越の頂に立つて、平家の城を眼の下に見おろした時には、大手の生田の森の方も、搦手の海岸の方も、合戰の眞最中でした。
源平の大軍は入り亂れて戰つてゐるが、その喚き聲と叫び聲、それに馬を駈りまはせる聲がまじつて、山や谷の立てる山彦と一しよになつて雷の鳴るやうでした。雙方で射る矢は雨のやうでした。疵をうけながら戰ふ者、組合ふ者、刺し違へて死ぬ者、首を切る者、切られる者など、そこいらに一面でした。そして合戰は何方が勝つとも分らなく見えました。（つゞく）

白犬（推奨童話）

大西淳

石治、といつても、男の兒ではありませんよ。可愛相な老犬に、私がつけてやりました名です。

私が十二位の時でした。私はお母さんが違つてゐたので、學校も早くから上げられて、田舎の事ですから、夜明の空に、まだお星が急がしさうに瞬いてゐる頃に起きて、暗い裏山へ柴を取りに出かけるのです。そして自分の丈より幾倍も大きい把を背負ひながら、竹の息杖で、エッサ〳〵と山坂を下る頃合には、お山の後から赤い太陽が登つて、暖い日光が照返してゐます。山の麓までくると、枚を張り巡らした松の木があつて、木の根元に大きな石が轉つてゐました。そこで私は



重い柴把を下して、少し息を休めるのです。もう學校の始まる時刻と見えて、村の子供達が、包を振り廻したり、歌を歌つたり、ふざけながら面白さうに行くのに逢ひます。其の度に、私も學校に行けたらと、思はず羨しくなるのです。

それはもう山の木に、柔い嫩芽がぐんぐんのびて、奇麗な花が咲き出した日でした。いつもの通りに柴を搗つて山を半分程下りてきた時に、不意と横合から白い犬が飛出して、噛みつく樣に吠えかゝつてきました。私は驚いて手の息杖で、力にまかせて擲ちますと「キャイン〳〵」と悲鳴をたてて尾をさけながら、何處かに逃げてしまひました。で私もそのまま家へ歸つていきました。

其の翌日です。昨日の事などはすつかり忘れて、何氣なしにそこを通りますと、どうしたのか、昨日の犬が矢張りゐて、私に恐れたのか噛みつかうともしないで、草叢から兩足を延して、頸を其の上に置いたまゝま低い聲で唸つてゐました。私が杖を上げて打つ眞似をしますと、あわてて茂みの中へ隱れてしまひました。何處から來たのか？、多分村の飼犬が追出されて、ここへ逃てきたのでせう。

其の時からいつも其處を通ると、犬は半身を草叢から延出して微に唸りながら、私を見上げてゐました。擲つ眞似もしないので逃げもやらず、私の歸るのを見送つてゐました。それが妙に私の氣にかかつてならないんです。

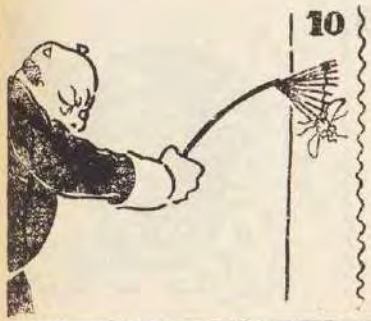
かれこれ十日も經つてからでせう。不思議にも犬は何に安心したのか、尾を振りながら足元へ嗅きにきて、チョコチョコと、二三間程もついてくる樣になりま

した。それは餘り大きく無い犬で、汚れた白い毛が長く全身を包んで、ただ兩耳と左の目の眉間に薄茶色の毛が生えてゐました。褐色に青味を帶びた愛嬌さうな二つの目は可愛らしいですが、痩こけて、年取つてゐる故か餘り元氣がありません。

其の犬が私の前後を嗅ぎ廻つたり、跳びついたりする程懷いたのは、幾日も經ての事でした。いつもの石の上で休んでゐると、クウン〳〵鼻を鳴らして身體を擦附けてきますと、私はすぐと抱き上げ、顔に頬擦をしてやるのです。

友達や親切な兄弟のない私は、それが弟の樣に可愛くつてならないんですけれど、家に連れて歸るとお母さんに吃度叱られるので、そつと小川に連れていつて、汚れた毛を奇麗に洗つてやつたり、町へいつた時に貰つてきた箱のなかへ納屋の藁を敷いて暖い床を、家の裏へ人目に觸れない樣に作つてやりました。そして山から歸つてくると、畑から取つてきたお芋を、蒸葉を敷いて燃した火の中へ入れて、ホコ〳〵したのを別け合つて喰べたり、御飯やお菜を少しく殘して置いて與へるのです。喉を鳴らして喰べる姿を見ると、何と無く愉快でした。お母さんに叱られた時でも、犬の姿を見るとすぐ悲しくなくなります。で、私は死んだ母のお石の石と、父の治三郎の治とを合せて、石治と云ふ名前をつけてやりました。石治とはいつも一緒に山へ行つたり使にいつたりしてほんとうに仲善になりました。

戒日の事　父にいひつかつて隣村まで、壊れた鋤を修繕にいくことになりました。少しく遠いので石治を殘して、一人三つ程の鋤を擔で出かけました。夏に近



い頃なのでお日樣がかん〳〵と照りつけて、蒸し返す樣な暑さでした。ただ小川の流が涼しそうに、軟ひながら流れてゐます。草で作つた笛を吹きながら三時頃村の入口まで歸つてきました。

すると、向ふから二三人の子供が、學校歸りか、包を斜に肩に掛けて、竹片で各々、草をしばつたり、大聲でわめいたりして、堤の上を歩いて來ました。此の子供達は村での腕白小僧で、私ん所の柿を盜んだり、畑を踏み荒したりするので、一度父に、散々叱られました。それから私を見る毎に、石を投げたり、擲つたりして、虐めるんです。皆は私より一ツ二ツ上なので、手向ひすれば負けるので、じいと耐へてゐました。今もここで逢つたのですが、逃げるに逃げられず、おど〳〵して來ました。

「ヤアー淳公が來たぞ。」と誰かが云ふと、

「泣かせ、泣かせ、弱蟲を泣かせ。」と云ひながら追つて來ました。私はびくびくしながら走て逃げやうとすると、

「コラ、淳公」と私の袖を掴つて放しません。

「淳公、此の間、ようも親父に云ひつけたな。」と怒しく睨みながら竹を鳴して、私の周圍を包圍ました。

「おら、何も知らんよ、父ちやんが勝手に怒つたんや、皆の手下になるから堪忍してくれ」震へながら數ら詫びても、許してくれません。

「いやだ、泣虫め」と私を突放しました。私はよろよろして、

「何をするや、父ちやんに云つけるぞ」

「親父が怒いか、擲れ〳〵」

竹片で打掛つてきますので、私は泣きながら必死になつて手向ひしました。

其時です。何處から飛できたか、石治が怒しい唸聲を立てて吠えつきました。

「ワアー、犬だ、犬だ。」と叫びながら一敵に子供達は逃げ出しました。石治も續いて少し追つていきましたが、立止まつて、

「ワアン〳〵」と吠えたててゐました。

私は逃げていく子供や、石治を見つめてゐました。忠義な石治は俄に尾を振つて、さも滿足氣に足元へ走つてきて、鼻を鳴らしながら、擦寄つて來ました。私は思はず抱き上げて、頬擦をすると、滑らかな舌で涙の跡を舐めてくれます。私は新しい涙が湧き出て、堅く石治を抱き締めました。

此の事があつてから一年たつた秋の日に、石治は老いていく年の爲遂に死んでしまひました。私は初めて出合つた、あの草叢へ埋葬してやりました。其の側に小さい松の苗を植ゑて、山にいく度に、お線香やお供物をしてやりました。そして私が大きくなつて、此の都にくる時には、植ゑて置いた松は水々しい綠を張つてゐました。今でも近所の犬を見たり、夜更に聞える犬の遠吠を耳にする毎に、獨り石治を思ひ出して泣くのです。（をはり）

十六角豆

野口雨情

胡麻の木
畑は
皆はねる
十六
角豆は

皆はねた
雀が
畑に
かくれてる
鐵槳
とんぼに
話して來

琴の太郎

（長篇童話）

小山内薫

前號までの梗概　太郎といふ少年は恐ろしい魔の海から聞えてくる琴の音にひきつけられて、大膽にもそこへ乘りこみました。だが神にも仏にも人たちのやうに殺されもしないで、かへつて魔王のひとり娘の海原姫の遊び相手になりました。太郎は姫の琴を聞きながら、姫から問はるゝまゝに、自分の國のお芝居のことや、お花見のことなどをいろ〳〵話して聞かせました。すると姫は人間の世界が急に戀しくなつてとろ〳〵。太郎と一しよに魔の國を逃げ出しました。太郎が姫をつれて家へ歸へると、家中は大喜びでした。ところがそれからいく日もたゝないある日、姫の振袖に黑羽の矢が一本たちました。そのあくる日からは毎日、太郎の家の門に一本づゝたちました。人々は不思議に思ひました。するとまたある日のこと、濱邊に一艘の漁船が着いて、その中から一人の漁師が浜へ上がつて何か呼びました。

四

漁夫は汗を流して、濱邊を馳け廻りながら。『姫を返せ。姫を返せ魔の力は大きいぞ。』と幾度もかう叫びました。さうして、しまひに疲れて倒れてしまつたきり、もうこの世の人ではありませんでした。

みんなは始めて、黑羽の矢が魔の爲業であつた事に氣がつきました。そして、恐れました。太郎の父親は、侍だけに、すぐと家來を遣れて、魔を征伐に行かうと言ひ出しました。それを聞くと、姫は自分の部屋を飛び出して來て、太郎や太郎の父親の前に身をひれ伏して、泣きながらかう言ひました。

『この間太郎さんと花畑へ行つた時、黑い矢があたしの袖へささつたのです。あたしは、もうその時、お父樣が怒つて、あたしを呼び戻さうとして入らつしやるのだと思ひました。けれども、皆さんに御心配をかけては濟みませんから、それなり默つてゐたのです。でも、あたし、隨分考へましたわ。毎日毎日。船へ歸らなければ、お父樣がきつと太郎さんのお家へ惡い事をするに違ひないと思ひました。あたしは幾度一人で歸らうと思つたか知れません。でも、どうしても、太郎さんに別れて、又あの薄暗い船へ歸る氣にはなれませんでした。』

姫は一息つきましたが、直ぐとまた詞を續けました。

『でも、歸らなければ、魔の世界の力であたしは引き戻されます。そして、きつとこのお家にも好くない事が起りますから、けふと言ふけふはどうしても、歸ります。伯父さん、伯母さん、太郎さん、長々御厄介になりました。お禮の印に、太郎さんに、この指輪を差し上げませう。これは魔の世界の印です。これを持つてゐればどんな海でも、荒海の中でも、平氣で通れます。どうも皆さんいろ〳〵お世話になりました。』

と、落ちて來る涙を絣縮緬の襦袢で拭きながら立ちあがりました。

太郎の父親は、慌てて留めました。

『姫。歸るには及びません。わしが家來を引き連

れて、かの船へ渡り、魔を生捕つて來ようと程に、暫くこれに待つてお出でなさい。』

『いえ、いえ。魔王の力は限りがありません。魔物はみんな影のやうなもので、刀でも斬れません手でも捕まへられません。それに、うつかり油の海へはひらうものなら、船は忽ち覆つて、人は沈んでしまひます。どうぞ、あたしの歸るのをお留め下さいますな。お父樣を宥めてから、又お家へ

戻つて參りませう。あたしはお父樣のところへ歸るのですから、決して悲しい事はありません。』

姫はみんなの留めるのを振り切るやうにして濱邊へ馳けて出ました。それでも、みんなはまだ留めようとして、あとを追ひかけましたが、姫は波打際まで來ると、袋を振り返つて、太郎の家の人や濱の人に、丁寧にお辭儀をしたかと思ふと、その袖振袖姿で、どん〳〵海の中へはひつて行きました。紫の振袖の袂が暫く水の上に浮いてゐましたが、忽ちそれも見えなくなつてしまひました。

濱の人も、太郎の家の人も、唯一輪咲いてゐた綺麗な花を風に折られでもしたやうに、みんな殘り惜しげに、ぼんやり海の方を眺めてゐました。

中でも太郎は、姫が海の中へはひつて行く美しい姿を、いつまでも思ひ出して、まるで氣の抜けた人のやうに、ぼんやり突つ立つてゐましたが、

いろ〳〵茂右衛門に慰められて、やつと夕方家へ歸りました。

家へ歸つてからも、太郎は姫の事ばかり考へてゐました。姫の姿はいつもまざ〳〵と太郎の頭の中にありました。太郎はその自分の頭の中にある姫と、花畑を歩いて一緒に話をしようとしましたが、その姫は決して物を言ひませんでした。それに、姿も見えるかと思へば消え、消えるかと思へば見えて、その賴りのなさと言つたらありません。

姫が海へはいつてから三日目の夕方です。太郎の家の軒で鳥の羽ばたきをする音がしました。太郎が何の氣なしに縁側へ出て見ますと、鳥は眞つ白な羽を廣げて、太郎の側へ飛んで來ました。そして、何か紙片を落しました。太郎がそれを拾つて見ると、やさしい女文字で、かう書いてありました。

太郎さん。

あたしは今うす暗い魔の船の一間に閉ぢこめられてゐます。あたしは里の事や、太郎さんの事を思つて、泣いてゐます。郎屋の窓へ侍女の白鳥が來ましたから、お手紙を差し上げます。御返事を下さいな。

太郎は大急ぎで返事を書いて、白鳥に渡しますと、白鳥は直ぐ飛んで行つてしまひました。

次ぎの日の夕方になると、また軒へ白鳥が來ました。太郎は大急ぎで手紙をとつて、讀んで見ますと、驚きました。

手紙にはかう書いてありました。

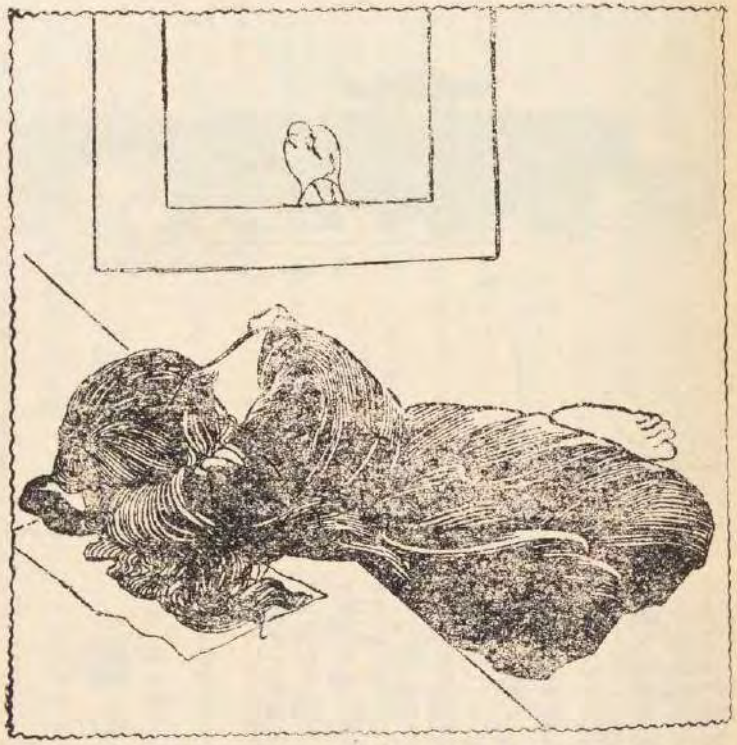
『大變です。

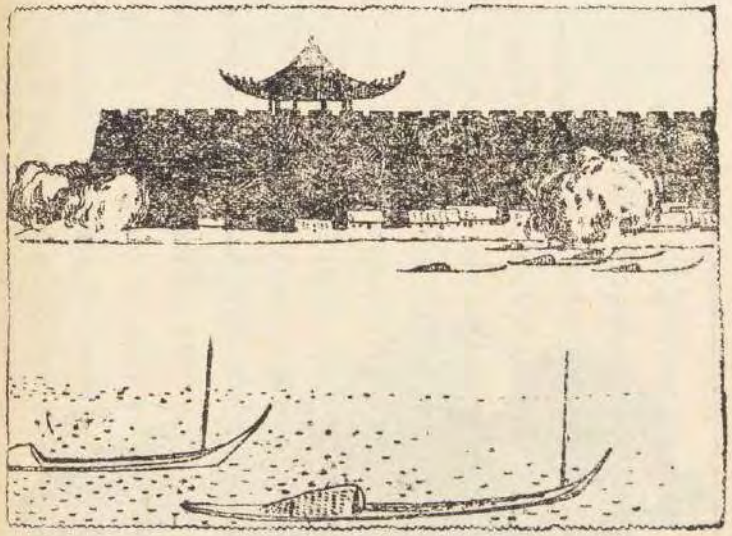
あなたがわたしを連れ出したのだと言ふので、魔の世界の惡漢どもが魔王をそそのかして、あ

なたを呪はうとしてゐます。
惡漢はあなたの姿を油で煮ると言つてゐます。
油の海の水で。どうかして下さい。それでないと、あなたの命があぶないから。あたしがいくら魔王に頼んでも、許して呉れませぬ。
心がせきますから、これで筆を置きます。
どうかして下さい。早く。
と、かう書いてあるのです。
太郎は驚きましたが、やがて心を落ちつけて、『心配するな。どうにかする。』と書いて遣りました。書いてはやりましたが、相手は魔の世界です。
さて、どうして好いか見當がつきません。で、その晩は、誰にも心配させまいと思つて、一人で工夫をしながら、夜を明かしてしまひました。
次の朝になると、また白鳥が遣つて來ました。今度の手紙にはかう書いてあります。

『いよ〳〵今日から油で煮るのです。今日の夕方には、繪姿は黑く焦げて跡方もなくなるでせう。それと一しよに、あなたのお命も終るのです。どうかして下さい。急いで。あたしには考へがつきません。會つてお話がしたいんですが、それも駄目です。皆樣と御相談遊ばして、夕方までにどうかして下さい。夕方にならない內に。』
としてあるのです。
太郎の顏色は、土のやうになりました。白鳥を歸して、ぢつと考へて見ましたが、別に好い工夫も出て來ません。なまじつか父親や何かに話をして、事を荒立てても、相手は魔の世界の事ですし、人間の力ではどうする事も出來ないと思ました。
『さうだ。』
暫しして、太郎は自分の手で自分の膝を打ました。
『さうだ。お父さんなどに相談するより、一人で出かけて行つて、ぢかに魔王に會つて進ぜよう。そして、するだけの言譯はして見ようさうすれば、油で煮る事は少しぐらゐ延ばして貰へるだらう。それから先の事は、又それから考へれば好い。兎に角もう一度魔の世界へ渡つて見ようかうやつてゐて死ぬ位なら、一かばちか、魔王に會つて、談判だけはして見よう。よし、船で行つて油の海へ投げ込まれても、姫に會つて死ぬ方が好い。この指輪さへあれば、油の海も恐れる事はないのだ。さ、直ぐに出かけよう。』
太郎はかう決心をしました。

（つゞく）





蟻のお國

（長篇童話）

長田秀雄

前篇までの梗概　淳さんは支那の偉い軍人でしたが、あまりお酒を飲むので免めさせられました。ある日不平をいひながら、自分の家のお庭でお酒を飲んでゐますと、蟻が長い列をつくつて、槐の木の根にある穴にはいりました。淳さんはそれを見ながら眠つて了ひました。目がさめると、大槐安國といふ國の王樣からお使が來て、淳さんに王女樣のお聟さんになつてくれといひました。淳さんが大槐安國へ行つて見ると、王樣は大層お喜びになつて、早速、金枝公主といふ美しい王女樣のお聟さんにしました。その頃、隣國の檀蘿國の王子が金枝公主をお嫁さんにほしがつてゐましたが、淳さんがお聟さんになつたことを聞いてくやしがつて、大槐安國へ攻めよせてくるといふ噂が立ちました。そこで淳さんは王樣のお命で、檀蘿國に一番近い南柯郡といふ土地の大守になつて、大勢の兵隊をつれて金枝公主と一しよにそこへ行くことになりました。人々は今にも攻めて來やしないかと思つてびくゝしてゐました。

淳さんは早速國王陛下のお前に出て、南柯郡の太守に任ぜられたお禮を申上げました。そして、淳さんの相手に呼寄せになつた舊い友だちの周さんと田さんとを、自分の手助けにつれてゆきたいと願ひました。可愛いお聟さんの云ふ事ですから陛下は何もかもお聽屆けになりました。

いよ〳〵發足の日が近づいてきました。お別れの宴會が毎日毎日續きました。淳さんは國王陛下の有難い御恩は決して忘れないと心に誓つて、旅へ出ました。紫の衣服を着た都の人たちは、街の兩側に並んで、淳さん夫婦の乘つてゐる馬車を送りました。

金枝公主はさすが女だけに、國王やお妃とのお別れが悲しいと見えて、馬車の内で泣いてゐました。淳さんはやさしく公主を慰めました。

二人の馬車が、南柯郡につくと、出迎えの役人たちが大勢待つてゐました。冠の影や、大きな美くしい旗が、日にかゞやいて何とも云へません。淳さんは、公主に、遠くのお城を指さして見せて、『あれが二人の住むお城だよ。立派な物ぢやないか。』と、云ひました。やがて馬車は吸込まれるやうに、そのお城の門に入つてゆきました。

淳さんが、そのお城に住むやうになつて暫らくすると、お父さんの處へやつた使の者が歸つてきました。淳さんは大さう嬉んで、その使を目通りに招びました。

使はお父さんの返事を持つてきました。返事には、かう書いてありました。

――お前があの日槐の樹の蔭から急に居なくなつてしまつたので、私は大へん心配して諸方捜したが、とう〳〵見付らなかつたから、もう死んだも

のと諦らめてしまつて、居なくなつた日を命日として、お位牌の前で、泣々拜んでゐました。すると黒い衣服を着て、紫の冠をかぶつた人が突然に私の前に現はれて、お前の手紙を差出しました。それを見たとき私はどんなに嬉しかつたか、お前には分るまい。お前が立派な身分になつたのを知つて、私はやつと安心しました。私は、もう老人だから、此處の家を守つて一生を終ります。お前はこれからさき仕合せで御暮らしなさい――またもしどんな事が起つて、家に歸つて來たくなつたら、何時でも歸つてくるがよい。お前が居なくなつた時のとほり、家の樣子はちつとも變つてはゐないから。

淳さんは手紙をよんで涙をこぼしました。年月は段々經つて行きました。淳さんは、その間、毎日々々、一生懸命になつて働きをあさめました。好きなお酒もなるべく飲まないやうにしてゐました淳さんの骨を折つた甲斐があつて、國は段々よくおさまつてきますし、盜人も出なくなりました。毎年田や畑には、いろ〳〵な野菜物やお米が大さうよく實りました。

お隣りの檀羅國では、大槐安國には、淳さんと云ふ賢い人がやつてきて、國の威勢が俄に強くなつたと云ふ評判をきいたので、暫らく攻めるのをよして、頻りにこつちの隙を伺つてゐました。

金枝公主は女のお子さんを一人生みました。女の子は瓊英公主と云ふ名をつけました。さすがお殿さんの子だけあつて、光り輝くやうな美くしいお子さんでした。淳さんも金枝公主も大へん瓊英公主を可愛がつてゐました。その内に二十年あまりの年月が經ちましたが、金枝公主はやはり昔のとほり奇麗で若々しい御姿をしていらつしやいました。

瓊英公主も二十歳になりました。二人が並んでゐると、誰も親子とは思ひませんでした。皆姉妹だと思ふ程、よく顏形も似てゐました。

檀羅國の王子は、先に金枝公主をお嫁さんに貰ひそこねたので、今度は瓊英公主を貰ひたいと申込んできました。

淳さんは瓊英公主を檀羅國の王子にやるのは厭でした。瓊英公主もお母さんのお伴さんにならうとしたやうな年を取つた人の處へお嫁に行くのは厭だと、心の内で思つてゐました。そこで淳さんは先方を怒らせないやうに、體裁よく斷つてやりました。

熱い熱い夏になりました。金枝公主は、その頃少し身體の工合が惡くなつたので、段々やせて來ました。淳さんは驚いて偉いお醫者を招んで診て

貰ひますと、お醫者は首を傾げて、

『お妃さまの御病氣は暑氣當りが原因で御座りますから、何處か涼しい土地に御住みになれば癒ります。』と申上げました。

淳さんは大切なお妃の事ですから、大さう心配して、國中で一番涼しい處は何處かと家來たちに尋ねました。周さんが、

『それは檀蘿國の境に近い塹江城で御座ります。』

とお答しました。すると智慧の深い田さんが、

『成程塹江城は前に大河を扣へて居つて涼しいには違い御座りませんが、檀蘿國に近いのが、心配で御座ります。』と眉をひそめて、申上げました。

淳さんは田さんの申分ももつともだとは思ひましたが、何分にもお妃の身體が大切なので、とうとう塹江城の内に、奇麗な別莊を造らせました。そして、涼しい上にも涼しかれと、その別莊は高い二階屋に建てさせました。

金枝公主を送つて、その別莊へやつて來た淳さんは、丁度八月十五夜のお月さまが、空の上に高くのぼつて、大きな河にキラ〳〵映つてゐるのを別莊の二階から眺めながら、二人でお酒を飲んで拳を彈いたり、笛を吹いたりして、樂しい一夜をすごしました。そのあくる日、淳さんは、一人で閣呵郡の都へと歸つて行きました。お姫さまの瓊英公主は、お母さんの病氣の看病に、塹江城の別莊に殘りました。

さうすると、果して、田さんが心配した通り檀蘿國の王子は、國の境に近い塹江城に、金枝公主が瓊英公主と二人で來てゐると云ふ噂をきいて、長い間の恨を晴し、ついでに瓊英公主を奪ひ取つて、自分のお妃にしやうと思つて、兵隊を大勢集めて不意に塹江城を攻める用意をいたしました。

そこで檀蘿國の王子は、まづほんとうに塹江城にお妃と、瓊英公主が來てゐるのか、どうか、また、お城の内には、どの位兵隊が居るか、戰をするには、どう云ふ風に攻めたらいゝかと云ふやうな事を探らせるために、自分の家來の内で、一番賢い男を、廻しものとして、塹江城へつかはしました。その男は國中で一番唄が上手でした。そこでその男はいろ〳〵な美くしい花を買ひあつめて

花賣りになりました。そしてお城の内の別莊の方へと歩いてゆきました。道々、その男は、

花召せ花召せ、金蓮花、

翠蘿花、さては寶檀花、

芍藥薔薇も御座ります。

御意のまにまに、花を召せ。

かう高い聲で唄ひながら、賣つて行きました。あんまり聲がいゝので、すぐ、花賣りの評判が高くなりました。病氣上りのお妃さまは退屈なあまりに、或時、お腰元にその花賣りを別莊のお庭に招入れさせました。そして、瓊英公主と一緒にその花賣りに唄を歌せてお聞きになりました。

花賣りはしめたと思つて、不斷より一層聲を張上げて、唄をうたひました。そして別莊の樣子を人に知れないやうに、すつかり見て置きました。

お妃さまは大さう花賣りの唄がお氣に召したので、早速その花を皆お買上げになりました。花賣は厚くお禮を申上げて急いで檀蘿國へ歸りました

愈々瓊英公主がお妃樣と二人で塹江城に來てゐる事を、その花賣りの家來からきいた檀蘿國の王子は、塹江城には淳さんも來て居らず、兵隊も少ししきや居ない事を知つて、大さう喜びました。

『ちや、すぐ、これから出かけるのだ。』と、かう王子は兵隊に云ひつけて、自分も銀をきたへて造つた鎧をきて、馬に乘りました。そして兵隊の揃ふのを待ち兼ねて、塹江城へと攻めよせました。

不思議な花賣りから、花を買つたお妃さまと瓊英公主は、その花を高い二階のお部屋中にかざつてその内でお話をしてゐました。涼しい風が吹いてくると、何とも云へないよい香が、花の蕚から出て、お二人の衣服に染みこんでしまひました。お二人は大へん喜んでそれを嗅いでゐました。すると塹江城の御門を守つてゐる兵隊が、あはてゝお妃さまの前へ來て、お辭儀をしました。そして、

『お妃さま。大へんで御座ります。天から降つたか地から湧いたか存じませんが、檀蘿國の兵隊が不意にお城間近く攻めよせて參りました。』と呼吸を切つて申上げました。（つゞく）

童謡

野口雨情選

小春

東京市本郷區弓町二
山田京二

てる〳〵坊さん
おびずるさん
頭に蜻蛉がとまつてる
笑つてるないで
とつとくれ

雀

京都市本町門松原上ル
竹村千代彦

小雀雀雀
お寺の鐘の
横木の上へ
藁の家を建てた
小雀雀
蠅撞き雀
撞木の上を
ぴよんぴよん渡れ

流星

長崎縣長崎京尾上町
片山白百合

お星が飛んだ
闇夜に飛んだ
山から海へ
いつさツさと飛んだ

おけら

埼玉縣入間郡吾妻村久米
平塚美奈吉

ほろほろほろとけらが啼く
なんだか悲しくなりました
ほろほろほろとけらが啼く

幼年詩

若山牧水選

海（賞）

兵庫縣細川第一小學校尋六
澤井清

朝の海に立つて見た。
お日樣はぽんやりと
雲の間から顔だして、
帆かけ舟を照らした。
帆かけ舟のぢいさんは
くろい顔を光らして
ぎつこん〳〵

こいでゆく

評、飾りのないほんとの心で歌つてあります、いゝ詩です（牧水）

カネツキドウ（賞）

長野縣宮田小學校尋二
西田一郎

ジヤン〳〵ナルカネツキドウ。
オヒルガキテハジヤアン〳〵。
宮田一バイヒビクカネツキドウ。
又ユフハンガキテハジヤアン〳〵。
ドコマデモヒビクカネツキドウ。

評、可愛らしい詩ですね、これもよくできてゐました（牧水）

兎

本郷區駒込町　塚本篤雄

白い白い眞白い
眼玉の赤い兎さん
少しの音にも眞白い
長い耳をぴんと立て
小屋の中から外を見て
ぴよんぴよんはねる白兎

評、小さい人には、小さい人らしいよい歌が作れるものですね、これも好きな詩です（牧水）

虹

兵庫細川第一小學校尋六
澤井勵

寺の上から虹が出た
長い〳〵虹が出た
きれいな〳〵虹の橋
だれが渡るか虹の橋

詩、美しい寫生詩ですね（牧水）

月見草

巣鴨町二丁目
人見靜子

お月樣が出たら
きィろい花が
たァつた一つ
ぽつかり咲いた

夏の夕

同

お日樣が赤い
夏の夕べ
蛍のともしび

夕立

同

夕立小立
どしやぶりだ
蛍の家を
なあがすな

夕日

福井縣本莊校高一
溝江隔

夕日
きら〳〵
金色の雲
銀色の山
廣いろい野原

雲雀

福井縣本莊校高二
山崎甚之丞

雲雀
ピーコロ〳〵

夜叉朝晩けらが啼く

尾長猫

越前國鶴賀港入船町　宮本重雄

隣の親猫　兒を產んだ
白猫　班猫　烏猫
揃ひもそろつた
尾長猫

烏

大阪市東區道修町五丁目　吉田友禾

寒い寒い　烏
薪三ば　背負つて
火はないか
火はないか

きれいな雪

新潟縣南魚沼郡浦佐　羽賀泰藏

きれいな雪が
上から降つて
白い雲ゐる
空まで
上アがれ

鼠

山梨縣一色小學校尋五　土橋郁子

おくらのかべの
すきまから
子鼠が
チョイと顏を出した。
ひつこんだ
又出た。
チョロチョロ
チョロチョロ
お家の物置きの
土臺の下へチョロチョロ

櫃鳥

牛込區河田町（十九）　佐藤勝熊

櫃鳥コツコツ
赤い櫃の實
お星さんが落ちて
實が落ちて
櫃鳥コツコツ
死にました。

煙

大阪府今宮第三小學校高一　東田正男

アチラノ煙突
コチラノ煙突
ドチラモ高クアガレ
通天閣ヨリモ
アチラノ山ヨリモ
勝ツタラホウビニ
ホシ取ツテアゲル
ドチラモ負ケズニ
高ク上レ
勝ツタラホウビニ
星取ツテアゲル

豐むつたお池
金魚の家は
夏まで寒い

芦舟

大分縣大牟田市旭町三　木村好榮

芦舟つくれ
一艘　二艘つくれ
娃の子供
のつけて流せ

機織

山口縣吉敷郡山口町　小川五郎

機織り蟲に機織らせう
銀の甘酒一杯飲ませう
みんなで〳〵機織らせう

星

東京府下杉並村高圓寺　長野桂子

海のやうなみ空

ほうづき

朝鮮釜山公立小學校尋六　松野雲子

私の島のほうづきは
くろいあんよをぴょん〳〵出して
青い着物を一枚二枚三枚
重ねて着てるよ
くろいあんよのほうづきよ

雀

山梨縣一色小學校尋五　土橋郁子

ガサガサ、ガサガサ
トタン屋根の雀
藁を一本くはへた。
すぐおとした。
二度目に拾つた
三度目にや風が
フーイととつてつた。
雀は泣き顏。

かしの葉

大阪市北區堂島裏（十一）　桑原光太郎

お池の上に
かしの葉が浮いてる
風におはれてゆら〳〵行けば
お池のこひがそれ見てにげた

シジフガラ

朝鮮京城日出小學校尋四　佐藤義信

南山デトツタ
シジフガラ
ウルシノ木カラ
バタ〳〵ト川ノ中ヘトオチャジタ

お池のかへる

大阪府今宮第三小學校高二　長澤誠二

わたしの家の
お池のかへる
大きなはすの葉に
きちんとすはり

お星さま一つ
三つ　四つ　五つ
千　萬　七つ
揃つて光る

蝸牛

滋賀縣八幡商業學校
柿沼　實

でん〳〵つむりの
あとおせ　わつしよ
うんとこさつさとおして見ろ
でん〳〵つむりは
角出さぬ
も少しわつしよとおして見ろ

春の鳥

神奈川縣中郡四葉野村
栗原　昇

春啼く鳥は
何々鳥だ
灯ともし頃に
杜の森で
鶯鳴いてゐた

何をするのかと
見てゐたら
子がへるに飛び方
をしへてた

お龍さま

長野縣松本、氣象(十二)
林　薫

お龍さま　お龍さま、
お宮の中に
居らしつしやる　お龍さま、
雨を降らして下さいな。
百姓は水がなくて
困つて居ます、
お龍さま
雨降らして下さいな。

あさがほ

米澤大町南部小學校尋四
山岸　孝二

あさがほよ、
てんとう樣に、
てられたら
きれいな花が
つほみます。
朝のうちは
おひめ樣
畫になれば
おばあさん

遠足

朝鮮京城日出小學校尋四
奥江　武夫

明日ハタノシイ
エンソク日
天氣ニナレト
テレテレボウズユ
イノツタカイガ
アラハレテ
空ニハ星ガ
ピイカピカ

お馬が通る

芙城縣多賀郡葉川村
吉田　せいてふ

お飾りつけた
お馬が通る
しあん〳〵しあんと
お鈴が鳴つた

雲雀

三重縣河邊郡若松村
伊藤　常雄

ピーチクピーチク鳴く雲雀
頭の天上で鳴く雲雀
畑に子供が待つてたぞ

象

名古屋市東區神樂町三
川本　弘二

象牙の鼻に
金の靴はかせ
眞赤に光る
ルビーの玉の
鳴子を振らせう

綴方

妙な題（賞）

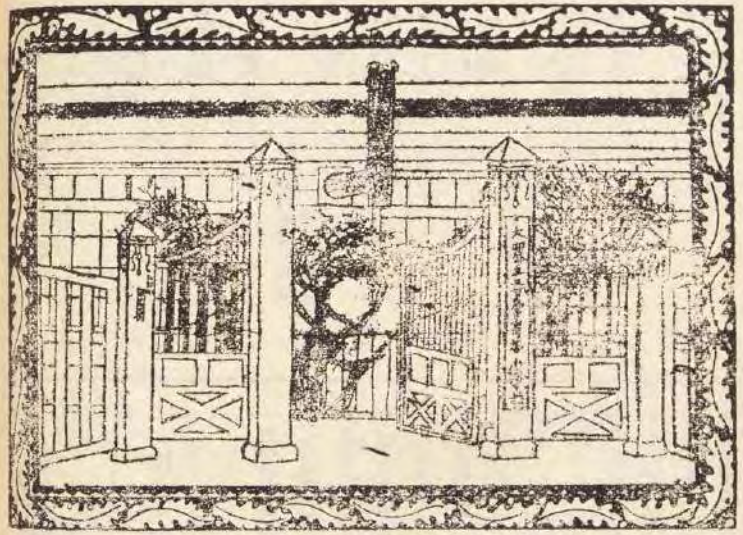
朝鮮大邱公立第一小學校尋六
米村　不二男

五時間目の禮がすんだ。先生は机の横にお出になつて、變な顔をして僕等を見ていらつした。僕は「又お小言かな。」と思つてじつと見てゐた。だしぬけに「目をつぶつて。」とおつしやつた。オヤ〳〵と思つてと目を閉ぢた。何だか目の前にちらついてゐるやうだ。直ぐ右で「クス〳〵」と石原君の笑ふ聲が聞える。後の方でも誰かしきりに笑つてゐるやうだ。あんまり變な氣持がするので、とう〳〵半分ばかりあけて先生を見た。右手で自分の目をさしたり僕の方をさしたり後の方をさしていらつしやるので、又目をとぢた。暫下では四年生がざわ〳〵と騒いでゐる。クス〳〵ッと笑ふ聲はやつぱりたえない。とたん「目をあけて。」とおつしやつた。目をあけるとやつぱり前と同じやうな顔で、教壇の上に立つていらつした。そして「今のことを綴方におかきなさい。」といつて、腰を下してしまはれた。妙な題だと思つたのか、皆顔を見合せてドッと笑つた。

かへる

愛知縣高岡第三小學校尋四
山川　茂

僕は竹をもつて、あそびにいかうと思つて、あぜ道を通りかけた。するとがあ〳〵と、一匹のかへるがさわいでゐた。よく見ると、かへるはさみにはさまれてゐた。僕は竹で、かへるはさみをぎゆつと、おさへてやつた。おどろいてつのをゆるめた。かへるはすぐ



自由畫「私の學校」(賞)　朝鮮大邱　竹中正男

にくさほこへかくれてしまつた。僕はほかの方へとかけしやとりとたゝいてやつた。むこうがはを見たらほかんとういてるたから、どろをそうとぶつけてやつたらにげていつた。

古つゞち

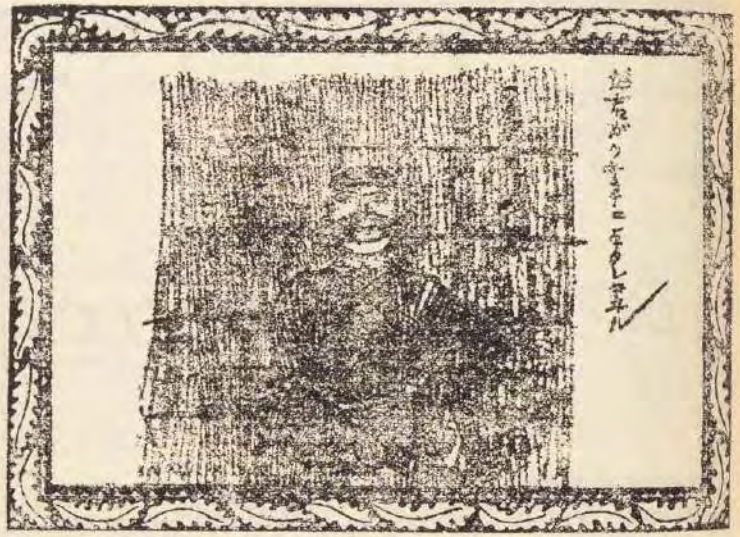
(賞)

山梨縣上九一色小學校尋五　土橋郁子

私の家には大へん古いつゞらがあります。もう眞黑にすゝけて色もよく分らず、所々白く紙がすれてもう少しで竹が見えさうになつてる所もあります。いつだがおばあさんと一しよにおくらへ用には入つた時、おくらの隅で見つけたのです。何でもずつと昔おぢいさんが買つて來られたのださうです。私には何だか舌切雀の話にあるつゞらの樣に思はれました。

それからおくらへ行く度にこのつゞらを見ると舌切雀を思ひ出しました。

昨日も弟や妹をつれて、おくらへ行つて見ました。すると、何だがその中が見たくてたまらず、こはごはソーッとふたをあけると、中はからつぽで古い本が二冊はいつて居ました。その時はほんとにつまらなくなつてしまひました。



自由畫「旭君」　愛知縣高岡第三小學校尋四　岩月完平

歸りの大荷物

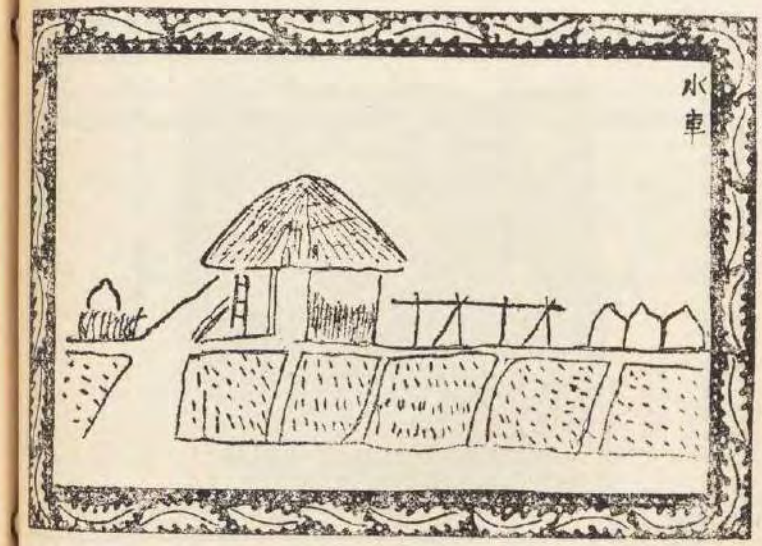
朝鮮大邱公立第一小學校尋六　市川鑑子

行く時には姉さん達と先きに出たのでよかつたけれどかへりはお母さんと一所だ　お駄さんはお隣りの菊ちやんを連れていらつしやる。それを私がつれてかへらなければならないことになつた。菊ちやんは中々重いので、たやすく引つぱれない。それもよそ見をしないで眞直ぐ歩いてくれればまだ助かるのだけれど、この頃めつたに外出をしない菊ちやんの事だから、見るものがみんなめづらしいのか歩いたり止つたり、中々道がはかどらない。「もつとさつさとお歩きなさいよ。」といふと少しの間だけは氣持よく歩くが又おそくなる。お母さんが後を見ては時々止つて待つて下さるので氣の毒で仕やうがない。一生懸命で引つぱるがやつぱり駄目。くたびれたのだらうと思ふけれども、

「くたびれたの。」ときくと、

「うんおんぶして。」

と甘へ出すので、いふことも出來ない。



自由畫「水車」　愛知縣高岡第三小學校　太田雄賢

夏川の前までくると、道が深くほつて兩側に土が積み上げてある。菊ちやんは遂々その上へ上つた。そして中々動かない。お母さんは又振りかへつて、

「そんな所へ上つてあぶないよ。」

とおつしやる。けれども菊ちやんは急に下りさうでもない。私は泣きたいやうな氣持になつてしまつた。

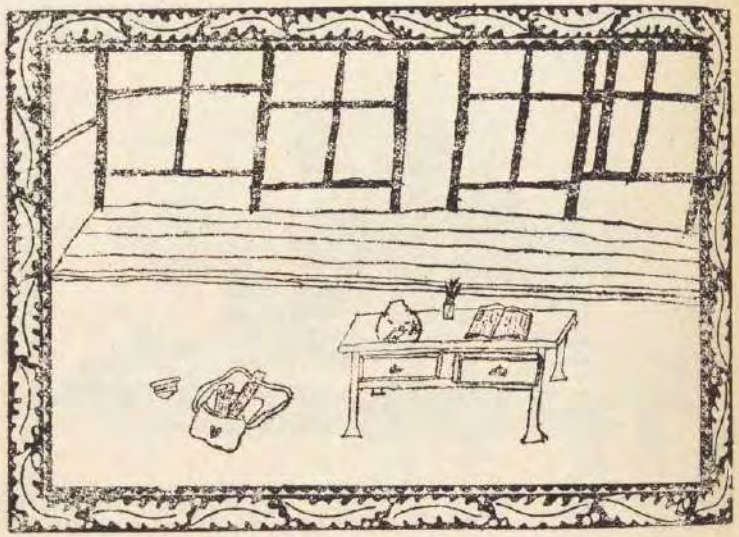
おいたの先生

朝鮮大邱公立第一小學校尋六　石非登美子

運動會の歸りには、藤本先生と御一所に、鮮人の家の間を通りました。

先生は「持つて上げやう。」と仰有つて、島田さんと私のコウモリを持つて下さいました。そして市場の細道を通つてゐました。もうその時はうす暗くなつてゐて、どこにも電燈やランプがアカ〳〵と照つてゐました。

その時一人の鮮人が、すぐ目の前を大きなチゲをせをつて、ノッソリ〳〵と歩いて行きます。おいたの先生は、直ぐ私と島田さんのコウモリを、チゲの上におのせになりました。チゲのおぢいさんは少し重くなつたと見えて、後の方をふりかへつて、おかから見てゐたり、たかから見たりしてゐる。あとで先生はコウモリを取つて畑らん顔でよそを見ていらつしやつた。



自由畫「僕の室」　京都植柳尋常小學校第二學年　藤田巻一

うちのねこ

大阪西區七條通二ノ十二（十一才）　佐藤きみ子

私のうちにはねこがかつてあります。私のうちのねこはごはんのさいそくのとき、のどをくる〳〵とならしてすそにつきまはります。ごはんをやると、さもおいしさうにたべます。のどをさすつてやると、心もちよさゝうにしてゐます。ときにはそのまゝねむつてしまふこともあります。とほくから、名をよぶと、すぐに走つて來てとびつきます。私のうちにゐるねこは、白と黒とのぶちねこですが、口のそばに白いひげがあつて、うつくしいつやづやした毛でつゝまれてゐます。

おやすみの日

長野縣宮田小學校尋二　西田一郎

僕は、今日二郎ちやんと、うちをこしらへました。二郎ちやんも、はたらきました。おもしろくありました。あとで、こわさうとおもつて、ほうで、たゝきますと、

自由畫「寫生」　武藏尋常高等小學校尋五　竹内正彦

がたん〳〵と、こわれました。さうして、耳のところへあたりました。僕はなきました。二郎さんはにげて行きました。

ゆふべの雨

會津若松第五小學校尋三　筒井きの

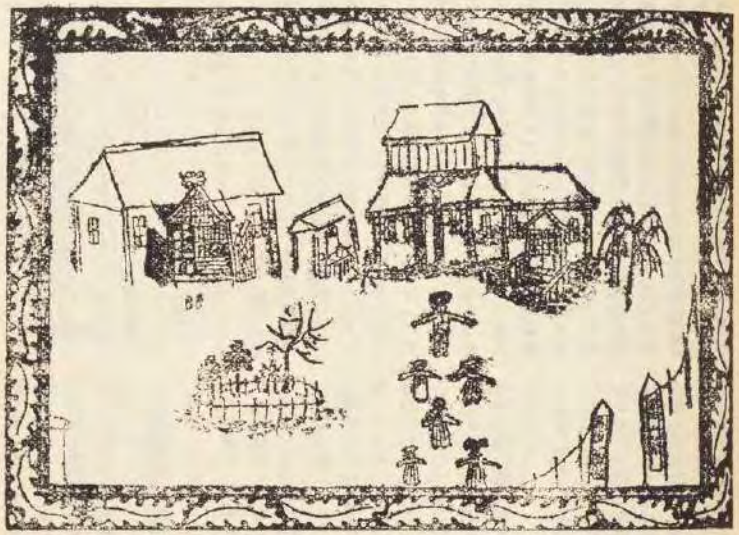
ゆふべおとうさんとおゆからあがつて、着物をきようとすると、雨がざあ〳〵とふつてきました。すこしたつといなびかりが、せんと屋のしやうじに青く光つたかと思ふと、かみなりがごろ〳〵なり出しました。

おとうさんは自分の手ぬぐひをかぶり、私はまへかけをかぶつていそいでかへりました。

私の弟

鹿兒島市四田小學校尋五　阿多ひで

私の弟は今年三つです。操と言ひます。操さんはいつでもにこ〳〵顔で、泣き顔を見せる事は、一日に一度か二度ぐらゐで、よくあやして上げると、すぐに泣き止みます。又時々いたづらをしますので、私共がしかりますと、今にも泣きさうになつて、「ねえ姉さん。」と言つて頭



自由畫「發想」(賞)　福島縣南會津山郡尋常小學校第六學年　杉山すみ子

けんを取ります。

體が丸々と太つて居ますので、私共は「操さん。」と、ほんとうの名は呼ばないで、「だるまさん。」とか「にこ〳〵さん。」とか言つておどかせたり、笑はせたりして毎日遊んで居ります。私が學校から歸つて、來ますとさも待ちかねて、居たやうにおえんから、「ねえちやん、ねえちやん。」と、きちがひのやうになつて、すがり附きます。

私どもが寢る時にもフトンを布きますと、おほつかない雨の手に枕をかゝへて、よち〳〵走で後から持つて來ます。又朝は早く起きないでもよいのに、私しどもよりも早く起きて、フトンの上に乘つてあばれますので、よく眠つて居る小さい妹さんをゆり起して、泣かせたりする事もたび〳〵あります。

お父さんもお母さんも、操さんを大切な寶物のやうに可愛がつてらいつしやいます。

▽俳作　△しけん　大阪　前田君子　△つらかつたこと　岡山　小橋幹子　△お正月　鹿兒島　濱田ルイ　△おひな樣　山梨　土橋千　▲四四のてふ　愛知　岩月正雲　▲雪の國　北海道　新谷吉信　▲うこぎつみ　福島　鈴木タル　▲春　福岡　荒川信二　▲すゝ　岐阜　田中寅一　△鬼　兵庫　荒木ソノコ

（通信）

童謡について

野口雨情

『鳥のお爺』は單純なところと言葉の無理でないところに面白味があります。童謡のねらひは、單純でなければいけません。くど〳〵しい事を並べたてるのは絶對にいけません。それから又、言葉の調子をわすれてはいけません。幾度も幾度も讀み返して見て、チッとでも調子に滑りがあつたら、滑りのなくなるまで、工夫してなほさればいけません。或人は、日本の言葉のひびきは、單調だから童謡には適さないと云つて、大層日本の言葉をよくないもののやうに云つたさうですが、その人は恐らく日本の言葉のほんたうのねうちを知らなかつた人でせう。いつたい、吾々日本人は、日本の言葉を持つて、日本の詩（童謡）を作ることは、ほこりでこそあれ少しも恥づべきことではありません。その國の詩にその國の言葉をもつて云ひ現はすよりそれ以上の完全さはないのであります。山田京二さんの『小春』は言葉にたるみおなくて、無邪氣なきちんとしたよい童謡でありました。

應募童話を讀んで

選者

この頃は、集る童話の數が少くなりましたこちらの求めてゐる標準が、知れたからでせう。從つて、ひどい作も無くなつて、選ぶ場合には非常に樂になりました。

締切までに集つた中では、益田氏の「悔の實」が一番いゝ作でした。扱つてゐる題材は横暴な士族の子と、貧乏な小商人の子とを含いたもので、誰でも書きさうな事ですが上すべりせずに、きび〳〵と描いてありました。作者が鋭い觀察をする人である事を想はせられました。

「スザンヌと王様」は非常な力作ですが、書いてある事は、お定りのお伽噺の域を脱してゐません。德永藤美子さんの「青いボート」に似た處があつて、面白くありませんでした。童話を藝術化する事に今一層努力して下さい。

大和氏の「醜い鴉」は、この前の「ひよ鳥の歌」より劣つてゐました。この作者は、表現も巧く、樂い用意をもつて書く人です。すなほだつた鴉が、夫婦に惡い鴉になつて行づた經路だけを語つて、あとは讀む者の反斷にまかせてある處は、作者の平凡でない事を語つてゐます。しかし、その經路を主に語だけで說明してゐるので、簡單過ぎてあつけなく思はれます。一體童話中に出て來る話は本來作の効果を非常に助けるものである筈なのに大抵の場合、作者に詩歌の訓練がない爲め、非常に拙です。一層、語をけずつて了ッた方がどれ程効果があるか解らないのです。ですが、「醜い鴉」の語は、あまり厭味もなく、かなり氣持ちよく讀めました。もう一歩踏み出して下さい。この作者はきつといゝ童話を作られるでせう。

遠藤京子さんの「蝶々の歌」は野の花を想はせる樣な、やさしい感じのする童話でした。婦人でなければかうした感じは出ないでせうこどもの日常生活を扱つたもので、千枝ちやんといふ女の子が、蝶々の蛹をこしらへてやつた事を書いたのです。併し、自分はこの種類の作に對して一つの疑問を抱いてゐます。かうした作は實に可憐で、本當に可愛らしい感じがするけれども、果してこの微妙な感じをこどもは受容れてくれるでせうか。こどもには、もつと大きな、荒削の藝術の方が理解されるのではないでせうか。こんな事を考へてゐます。皆さんのお考へはどんなものでせう。古來の童話文學の代表作は大抵大まかな藝術の樣です。「こどもにもつと微妙な藝術が解つてくれなければ困る。」といふ聲を度々ききます。しかし、それは、大人の「要求する子供」であつて、「本當のこども」とは隔遠いものではないでせうか。

尙この外にいろ〳〵書きたい作がありますが餘白がありませんから止めます。

綴方を見て

選者

米村君の「妙な題」市川さんの「歸りの大荷物」石井さんの「おいたの先生」などは、なか〳〵たつしやに書いてありました。「おいたの先生」は一寸面白いところへ目をつけました。遲動會のあつた日、運動會のことなどは書かないで、かへつてその歸り途におこつた一寸した出來事をとらへたところなどは氣がきいてゐますよ。けれどもあとの方においたの先生のことを誌しあつた會話がありましたれ。あの場合にあれはとけいなことです。全體の調子にたるみを與へるばかりですから、選者の方でけづつておきました。土橋さんの「古つぢら」も珍しい題でした。おくちにしまつてあつた古つぢらを見て、居切坐のお話を思ひ出して、弟さんや、妹さんと、ワットふたをあけて見ますと、中からは、實物でもてくるかと思つたら、古い本が二册出て來たので、つまらなくなつたといふのです。それにも少しよけいなところがありましたから、私がけづりました。私はなるたけ子供の作つたものは、なほさないやうにしてをりますが、あんまりよけいなところがあつたり、むだがあつたりして、しまりのないやうなものは、少しぐらゐなほすこともあります。「うちの猫」や「私の弟」などはありふれたものですが、すなほに書いあるところがいゝのです。しかしなるたけ變つた題材をとりあつかつたものを私は喜びます。變つたものならどんなのでもいゝといふのではありませんが、同じやうに上手に正直に、書いてあるものでも、これ迄に、ずゐぶん他の人たちによつて書かれたものと、まだ誰にも書かれないやうなものを書いたのと、どちらがいゝかと言へば、むろん、まだ誰にも書かれないやうなものを書いたのがいゝのです。

今月は全體から言ふと、いいのがありませんでした。こゝへ出したもののうちでも、ところ〴〵私が手を入れなければならなかつたりしてほんとうに殘念に思ひます。もつともつと勉强して下さい。

▲阪田藤香氏　御住所をお知らせ下さい。編輯所あてに。

▲正誤「金の船」六月號の幼年詩に當選しました佐々木ひさゑさんの母校を、東京府下王子小學校としたのは大阪市第二桃園小學校の誤です。佐々木さんにお詫びいたします。

▲「金の船」誌友　▽滋賀　木俣修二君▽東京　山崎和興君▽大阪　佐々木ひさ江君▽長野　井上まさ子君▽東京　平櫛俊郎君▽三重　鵜澤正君▽愛知　鷲山峰子君▽岡山　藤田浅太郎君▽北海道　大橋象藏君▽下關　林克孝君▽朝鮮　君島敏三郎君▽島根　栗栖遐春君▽青森　豐川菊治君▽秋田　徒原尙文君▽福井　藤田榮君▽山梨　有吉新君▽愛知　永田登太郎君▽兵庫　土井庸三君▽靜岡　市川竹次郎君▽廣島　古市篤介君▽栃木　村田歌子君▽福岡　水島滋君▽名古屋　前田一民君▽朝鮮　奥山義雄君▽岐阜　稱風意一君▽大阪　岡　嬰夫君▽岐阜　池田清三君▽京都　蒲田種子君▽山口　石川勝君（以下次號）

子供の自由畫を募る

山本鼎

子供諸君、――こんど、この雜誌で君たちの畫をいたゞいて、僕が、みんなの畫のうちから、選むだのを、毎月六つぐらゐ此處に、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雜誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちはお手本や、雜誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顏なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらんなさい。

お手本を見て描いたり、雜誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ

それから、あんまり、うすく、ぼんやりかいてある畫は、たいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雜誌へは出されません。そのかはりそんないゝ畫は僕が藏いてだいじにしまつておきます。

大人諸君、――以上の企を御賛成下さいまし。子供達は、本來、お手本を眞似するよりも、自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを、描き度がるものです。さういふ子供には、出來るだけ、良質の畫用品を與へて下さいまし。そして、子供を愛すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さいまし。

大人に、智、感、悄がある如く、小供にも智、感、悄があります。大人に美術がある如く子供にも美術があるのです。子供の美術は彼れの眼と手とによつて自然から直接に授へられた、そのものです。

◎童話童謡募集

吾々はかくれたる童話、童謡作家を紹介したいが爲めに、毎月童話童謡を募集いたします。題材は勿論作家の自由ですが、内容形式は共に從來の型を破つた、眞に藝術的な作品を求めます。

原稿の枚數は、童話の場合には十行廿字詰原稿紙八枚以内、童謡の場合は廿五行以内。優秀な作品は誌上に掲載し、且相當稿料を差上げます。

選者は、童謡は野口雨情先生、童話は當分の内編輯部でいたします。

◎「金の船」誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友になれば、いろ〳〵の便宜や特典がございます。誌友規則を知りたい方は編輯所宛にお申込み下さい。すぐお知らせいたします。

東京府下田端三百五十一番地
「金の船」編輯所

◎少年少女の創作募集◎

（原稿は東京府下田端三五一番地「金の船」編輯所へ送つて下さい）

自由畫　山本鼎先生選

自由畫のことは、山本鼎先生が、前頁に書いて下すつたから、ごらん下さい。

綴方　編輯部選

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、そのまゝふだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

幼年詩　若山牧水先生選

幼年詩は山なり森なり花なり何でも見たり、感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

□自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に畫いて下さい。

□綴方、幼年詩も用紙も字數も、みなさんの自由です。しかし、解りやすい樣に墨かインクで書いて下さい。

□住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。

□人のものを眞似たり雜誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。

□よく出來たのは、雜誌にのせます、中でも優れたのには賞品をさしあげます。

□定價一冊三十錢　送料壹錢
□三ヶ月分三冊（送料共）九十錢
□半年分六冊（送料共）壹圓八十錢
□壹ヶ年分十二冊（送料共）三圓四十錢
振替口座東京參〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

（送金の注意）

▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷
▽切手代用は（壹錢切手）一割增に願ひます
▽御注文の場合は第何卷第何號よりと云ふことを明瞭に書いて下さい
▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正九年六月七日印刷納本（毎月一回）
大正九年七月一日發行（一日發行）

東京府下田端三百五十一番地
編輯人　齋藤佐次郎

東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行人　横山壽萬

東京市京橋區月町二十五番地
印刷人　高橋郁

東京市京橋區月町二十五番地
印刷所　三協印刷株式會社

東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行所　キンノツノ社

大正八年十月十六日　大正九年六月五日印刷納本
（第三種郵便物認可）　大正九年七月一日發行（毎月一回一日發行）
東京　キンノツノ社　發行

西村アヤ作及畫（再版出來!!）

繪入童話　ピノチヨ

山本鼎先生序、沖野岩三郎先生跋

「ピノチヨ」は、あやつり人形のお話を書いたそれは面白い長篇童話です。もとは西洋のお話ですが、それをアヤ子さんが記憶を辿ってすつかり自分のものとして書いたのです。和畫から本の裝禎まで、何から何まで一人で作り上げたもので、日本ではじめての稀しい出版です。この寶石の樣な童話が、どんなに皆なの人に驚きと喜びとを與へる事か。果せる哉、「ピノチヨ」の賣行きは素晴しいもので、再版も盡きやうとし、目下三版印刷中!!

アヤ子さんが、非常な天才を持つた少女である事は、幼稚園時代に教へた沖野岩三郎氏の既に認めた處でした。今や、凡ての藝術が根底から出直さねばならぬ時、この純な作物が如何に深い暗示を與へる事でせう。童話として面白くて堪らない事は勿論の事、教師、女士、美術家の好資料であると同時に、少年少女の綴方の得離き好模範です。

十二歳の天才的少女が書いた空前の童話出版!!

特價　金壹圓卅五錢（郵税拾二錢）

□□　東京麹町區飯田町　キンノツノ社　振替東京三〇五七二　□□